北海学園大学　経済学部

地域研修報告書
2024

Hokkai-gakuen University

#北海学園大学経済学部
#地域研修

CONTENTS

北海学園大学経済学部●地域研修報告書2024

1 …… 2024年度『地域研修報告書』の発行にあたって

2・3 …… 地域研修1年間の流れ・地域研修履修者数と実施ゼミ数・2024年度 研修地一覧

4〜33 …… 地域研修ゼミ報告（2024年度 地域研修 Ⅰ・Ⅱ）

4 1部・2部浅妻ゼミⅡ
都市の人口分布・人口変動と商業立地の関係性
研修地／室蘭市・札幌市

5 1部上園ゼミ Ⅰ
豊富町の持続可能な産業と地域づくり
研修地／豊富町

6 1部上園ゼミ Ⅱ・2部上園ゼミ Ⅰ·Ⅱ
岩内町の持続可能な地域づくり
研修地／岩内町

7 1部牛久ゼミ Ⅱ
ニセコに学ぶ多文化共生と持続可能な街づくり
研修地／ニセコ町

8 1部・2部内田ゼミ Ⅰ·Ⅱ
小樽市のまちづくりリーダーのライフヒストリー
研修地／小樽市

9 1部大貝ゼミ Ⅰ
日高地方の軽種馬産業における外国人労働力と多文化共生
研修地／日高町、新ひだか町、浦河町

10 1部大貝ゼミ Ⅱ
過疎地域における廃校活用と地域コミュニティ
研修地／鳥取県八頭町、智頭町、岡山県西粟倉村、京都府京都市

11 1部佐藤ゼミ Ⅰ
コープさっぽろの事業経営と地域貢献を学ぶ
研修地／江別市・札幌市

12 1部佐藤ゼミ Ⅱ
留萌南部における交流人口増加の取り組みと生協による生活サポート効果
研修地／小平町・留萌市・増毛町

13 1部・2部土橋ゼミ Ⅰ
帯広市から考える多文化共生社会への道
研修地／帯広市

14 1部中囿ゼミ Ⅱ
LGBTQの人が置かれている現状と日本における制度の課題
研修地／札幌市

15 1部西村ゼミ Ⅰ·Ⅱ（芽室班）
空き店舗を活用した地域共生社会づくり〜多世代交流イベント開催を通じた検証〜研修地／芽室町

16 1部西村ゼミ Ⅰ·Ⅱ（留萌班）
「道の駅」を拠点とした観光まちづくりの展開
研修地／留萌市など

17 1部濱田ゼミ Ⅰ·Ⅱ
過疎地に若者を呼ぶ着地型観光プログラムをつくる
研修地／沼田町

18 2部西村ゼミ・濱田ゼミ Ⅰ·Ⅱ合同研修
豊浦町の移住政策と空き家対策−空き家と残置物の調査
研修地／豊浦町

20 1部・2部平野ゼミ Ⅰ·Ⅱ
北海道の企業・大学・行政におけるSDGsの取り組みについて
研修地／札幌市

22 1部藤田ゼミ Ⅰ
ダークツーリズムの光と影〜歴史の記憶と観光の課題〜
研修地／兵庫県淡路市・洲本市・神戸市・大阪府大阪市

23 1部藤田ゼミ Ⅱ
室蘭線黄色線区、「存続」か「廃止」か
研修地／栗山町、安平町

24 2部藤田ゼミ Ⅰ·Ⅱ
分散型旅行を見据えた新たな観光ルートの発掘
研修地／長沼町

25 1部古林ゼミ Ⅱ
地域経済におけるばんえい競馬の役割と課題
研修地／帯広市、本別町

26 1部水野ゼミ Ⅰ·Ⅱ
北海道開拓時の囚人労働の実態を学ぶ
研修地／月形町・当別町

27 1部水野谷ゼミ Ⅰ·Ⅱ
人口減少社会の現状と解決に向けた展望
研修地／帯広市

28 2部水野谷ゼミ Ⅱ
釧路町の観光振興を考える
研修地／釧路町

29 1部宮入ゼミ Ⅰ·Ⅱ
物価高騰下における北海道酪農の課題と対策
研修地／足寄町

30 2部宮入ゼミ Ⅰ·Ⅱ
道内野菜産地と大規模生産法人の発展の方向性
研修地／富良野市

31 1部山田ゼミ Ⅰ
室蘭市のデジタル化の取組と課題についての訪問調査
研修地／室蘭市

32 1部山田ゼミ Ⅱ
会津若松市のデジタル田園都市の取組の理解と課題の検証
研修地／福島県会津若松市

33 2部山田ゼミ Ⅰ·Ⅱ
倶知安町観光DXの開発と実態の検証
研修地／倶知安町

34 …… 地域研修報告会

2024 年度
『地域研修報告書』の発行にあたって

北海学園大学経済学部長　浅妻　裕

地域研修は地方自治体、民間企業、非営利団体など、地域のさまざまな関係者の協力のもと、地域課題の把握やその解決方策を学ぶ科目です。地域経済学科設置に伴って始まったこの科目は今年度で21回目を迎え、経済学部を代表する科目となっています。活動単位はゼミナールと同様で、夏休みを中心に対象地域のフィールドワークを実施します。訪問前・後にもしっかり学習を積み重ね、その成果を地域研修報告会で発表します。このようなフィールドワークを中心に据えた科目は、座学で修得した経済学の理論や知識を肌感覚で捉えた現実の人びとの営みや社会のあり方とすりあわせ、再び言語化して知へと回収していく重要な機会です。受講する学生にとっては大学生活においてもっとも貴重な体験の時間となっています。

今年度も道内中心に28件の研修を無事に終えて年末の「地域研修報告会」の開催と、今回の報告書発行にこぎ着けることができました。これもひとえにご協力いただいた地域のみなさまのお陰と存じます。心から感謝申しあげます。

この地域研修報告書には、人口減少など深刻な社会課題を抱えつつも、将来に向けた様々な取り組みを行っている地域において、研修に真剣に取り組む学生たちの様子が記録されています。この報告書を手に取ったみなさん、是非とも最後まで読み通しいただき、学生諸君の活躍ぶりをご覧下さい。

そして、この報告書をきっかけに地域研修に興味を抱いたみなさん、次の参加をお待ちしております。

地域研修1年間の流れ

地域研修は夏休みに行われる現地研修と、事前学習・事後学習・報告会でのプレゼンテーションから構成されます。教室での経済学・地域経済学関連の講義から学んだことと、地域のリアルな実態を結びつけて理解するために、複合的な要素から構成した実践的な科目です。

4月 ● **地域研修ガイダンス**
地域研修担当教員から当該年度の地域研修に関するガイダンスを受けます。

5月〜7月 ● **事前学習**（研修テーマなどの決定）
ゼミ担当教員の指導のもと、ゼミ単位で研修対象地域の社会、経済状況などについて、自ら収集した資料によって、研究対象地域の概要を勉強します。

8月〜10月 ● **地域研修実施**
おおむね夏休み後半から10月初旬にかけて現地研修を行います。現地研修では自治体・関連団体・企業などからのヒアリング、施設見学、アンケート等の実態調査、フィールドワーク、などを行います。

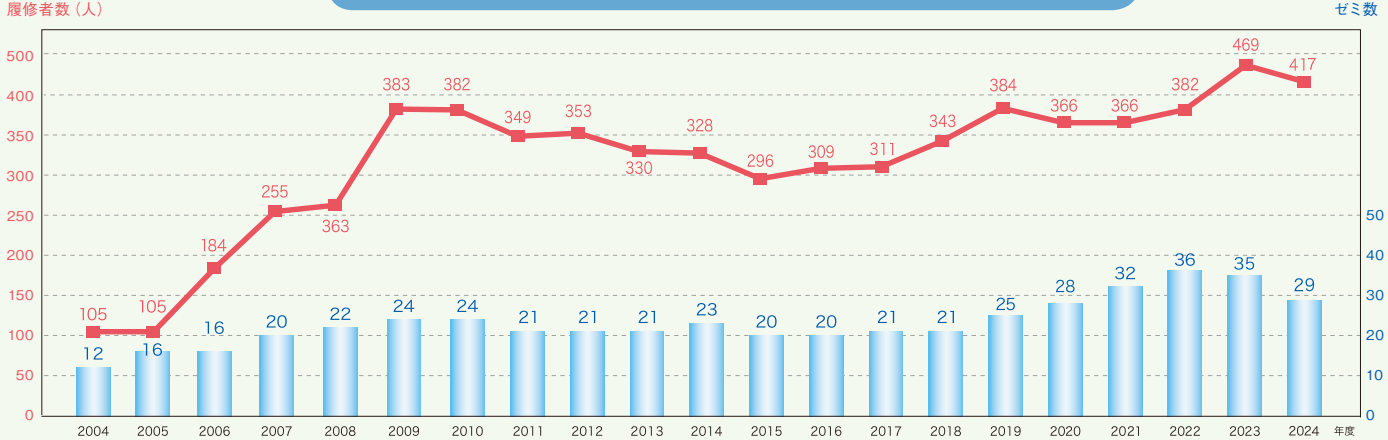
10月〜11月 ● **事後学習**
ゼミ担当教員の指導の下、研修成果をまとめます。また予定される地域研修報告会に向けて準備を行います。

12月 ● **地域研修報告会**
地域研修の成果に基づいて研修レポートを作成し、ゼミ単位で発表を行い研修成果をゼミ相互で確認しあいます。

3月 ● **地域研修報告書の作成**
地域研修報告会の研修レポートをもとに、研修の成果を報告書としてまとめます。

1〜6各ゼミによる現地研修。7 8事後学習・報告会準備。

地域研修履修者数と実施ゼミ数 2004〜2024



2024年度　研修地一覧

宗谷総合振興局管内
A　豊富町　上園ゼミⅠ

留萌振興局管内
B　留萌市　佐藤ゼミⅡ
　　西村ゼミⅠ･Ⅱ
C　小平町　佐藤ゼミⅡ
D　増毛町　佐藤ゼミⅡ

上川総合振興局管内
E　富良野市　2部宮入ゼミⅠ･Ⅱ

空知総合振興局管内
F　沼田町　濱田ゼミⅠ･Ⅱ
G　月形町　水野ゼミⅠ･Ⅱ
H　栗山町　藤田ゼミⅡ
I　長沼町　2部藤田ゼミⅠ･Ⅱ

石狩振興局管内
O　札幌市　浅妻ゼミⅡ
　　2部浅妻ゼミⅡ
　　佐藤ゼミⅠ
　　中囿ゼミⅡ
　　平野ゼミⅠ･Ⅱ
　　2部平野ゼミⅠ･Ⅱ
P　江別市　佐藤ゼミⅠ
Q　当別町　水野ゼミⅠ･Ⅱ

釧路総合振興局管内
J　釧路町　2部水野谷ゼミⅡ

十勝総合振興局管内
K　帯広市　古林ゼミⅡ
　　水野谷ゼミⅠ･Ⅱ
　　1･2部土橋ゼミⅠ
L　本別町　古林ゼミⅡ
M　芽室町　西村ゼミⅠ･Ⅱ
N　足寄町　宮入ゼミⅠ･Ⅱ

後志総合振興局管内
R　小樽市　1･2部内田ゼミⅠ･Ⅱ
S　ニセコ町　牛久ゼミⅡ
T　倶知安町　2部山田ゼミⅠ･Ⅱ
U　岩内町　上園ゼミⅡ
　　2部上園ゼミⅠ･Ⅱ

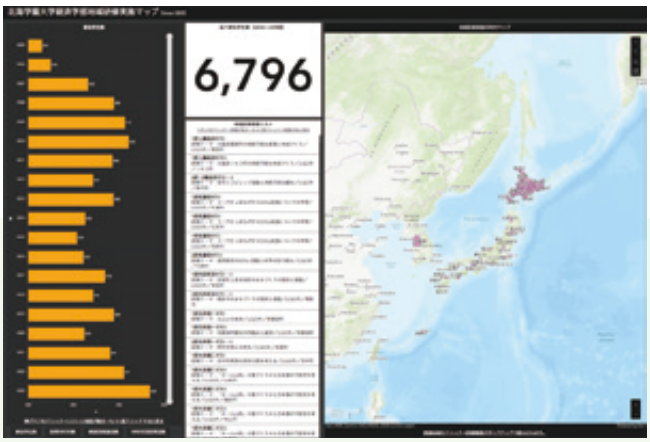
胆振総合振興局管内
V　室蘭市　浅妻ゼミⅡ
　　山田ゼミⅠ
W　豊浦町　2部西村ゼミⅠ･Ⅱ
　　2部濱田ゼミⅠ･Ⅱ
X　安平町　藤田ゼミⅡ

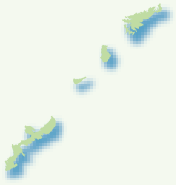
日高振興局管内
Y　日高町　大貝ゼミⅠ
Z　新ひだか町　大貝ゼミⅠ
AA　浦河町　大貝ゼミⅠ

福島県 会津若松市　山田ゼミⅡ
京都府 京都市
大貝ゼミⅡ
鳥取県八頭町、智頭町
大貝ゼミⅡ
岡山県 西粟倉村　大貝ゼミⅡ
大阪府 大阪市
藤田ゼミⅠ
兵庫県 淡路市・洲本市・神戸市
藤田ゼミⅠ

▶▶経済学部webサイトで、これまでの研修地や参加者数を、地図化して掲載しています。

https://econ.hgu.jp/program/field-work.html





1部・2部
浅妻裕ゼミⅡ

参加学生数19名

浅妻 裕
経済学科
教授

道内貨物輸送で活躍したD51を前に

都市の人口分布・人口変動と商業立地の関係性

研修地：室蘭市・札幌市

◉研修目的

人口分布・人口変動と商業立地の関係を追究する。商業立地においては，小地域・商圏人口は重要な要素だが，自動車依存が進んだ都市では周辺人口との関係が強くないことが想定される。室蘭市を事例に，実際の利用情報を加味して，このことを説明できるのか検討を試みた。

研修先・日程

9月22日　とんてん館にて研修
　　白鳥台地区巡検
　　道の駅みたらにて研修
　　フィールドワークデモ
9月23日　終日各担当箇所でフィールドワーク
　　洞爺湖温泉へ
9月24日　JRにて帰札

写真①スマホを用いてフィールドワークを行う。②とんてん館にて。③とんてん館の資料（町名の由来）。④コンビニ前にてデータ入力中。⑤中央地区のサツドラ。左は室蘭新道の入り口。⑥白鳥台地区のスーパーマーケット。⑦客車ボックスシートが活用されている（旧室蘭駅）。

①

②

③

④

⑤

⑥

⑦

◉総　括

GISwebアプリケーションの理解を前提に，事前・事後学習や現地調査（店舗への来店方法・年齢層など）を実施した。室蘭市内の商業立地は，人口密度が高い（JR室蘭本線北側）中島・東明地区が比較的多く，また各店舗の商圏人口も概ね4,000人を超えている。一方で，半島部にあたる中央・港南地区などは商圏人口が2,000人を切る店舗が多数立地している。人口減少や高齢化が進んでいる地区では人口当たりの店舗数が極端に大きくなる。日中時間帯の店舗利用実態調査では，コンビニエンスストアについて，中年男性の利用が多いこと，また比較的自動車来店率が高いことがわかった。この結果から，①人口分布に基づく立地であれば，人口密度の高い地区の店舗がより多く（人口密度の低い地区の店舗数がより少なく）なるはずで，また自動車の来店率が高いことから，商圏人口に依存して立地するという単純化が出来ないこと，②同時に，①の状況が発生している理由の一つに，人口減少下の地域では立地の「慣性」が働いており，地域の欠かせないインフラとしての機能が備わっている可能性があること，が明らかとなった。

なお，初日にエクスカーションを実施したことによって，エリアごとの「まちの姿」をイメージしつつ，今回の調査・分析を行うことが出来た。加えて，札幌市でも，札幌駅周辺におけるインフラ配置について，同様にGISを用いたフィールドワークを通じて探究を行った。

学生研修記

鈴木 恵斗
経済学科３年
北海学園札幌高校出身

室蘭における人口分布と店舗立地の関係性

今回の地域研修は、室蘭で２日間にわたって実施され、初日は、とんてん館や旧室蘭駅、母恋駅、輪西駅、農地、観光地などに伺い、観光をしつつ、室蘭についての歴史などの基礎知識をつけることができました。２日目は今回の地域研修の主目的である「人口分布と店舗立地の関係性」について自らの足で調査するフィールドワークを行いました。

調査方法は、４つのグループに分かれ、それぞれが担当エリアのコンビニ・スーパー・ドラッグストアの駐車場有無・台数、面する道路の車線数、交通量（10分）、一定の範囲（100m等）の戸建て住宅件数・集合住宅件数の確認、病院やその他インフラ配置の確認を行うというもので、調査結果から、店舗立地と小地域の人口の関係性は低く、多くが大通り沿いに立地しているということがわかりました。

今回の地域研修を通して、ゼミ全体で一つの目標に向かい、協力し、調査することで、とても有意義な時間を過ごすことができたと感じました。

森 拓也
経済学科３年
小樽潮陵高校出身

室蘭の商業施設に関するGIS到達圏分析を用いた考察

今年度の調査では室蘭市での調査を行い、コンビニエンスストアやスーパー、ドラッグストアなど商業施設の利用者に対する調査を行いました。店舗は徒歩での調査のほか、バスを利用して目的の店舗まで向かって調査をするグループもありました。昨年度と同様にGISアプリを用いて事前に調査する内容をまとめた調査票をダウンロードし、調査した地点をマップ上で可視化することでデータをより視覚的に捉えるということ意識して今年も調査に臨みました。実際に徒歩での調査を行ってみて同じコンビニでも立地に特徴があり、徒歩で行きやすい店舗や車での来店が予想される店舗がはっきりとみられることができ、非常に興味深い結果が得られました。

1部
上園昌武ゼミⅠ

参加学生数13名

上園 昌武
経済学科
教授

雄大な大規模草地にて

豊富町の持続可能な産業と地域づくり

研修地：豊富町

◉研修目的

豊富町は、過疎高齢化問題に直面しており、どのように持続可能な産業と地域づくりを展開していけばよいのかを問題意識にもって調査に取り組んだ。調査テーマを３つに分け（酪農・エネルギー、観光と温泉、教育・子育て）、実態の把握と提案づくりを目指した。

研修先・日程

9月16日　沖式ヨガインストラクター（ヨガ体験、「アトピーと温泉」の講演）
9月17日　NPOミラココ（子育てサークル活動のヒアリング）、サロママ（子育てサークル活動のヒアリング）、豊富町観光協会の講演「豊富町の観光業の特徴」、餅カフェわが家（昼食、「湯治移住者の生活と食堂経営」の講演）、サロベツ湿原（現地ガイド同伴のツアー）、豊富温泉コンシェルジェデスクの講演「ミライノトウジの取り組み」、北海道豊富高校（「地域づくりとは何か?」学生と生徒とのワークショップ）、風力発電と送電・蓄電施設（電力事業のヒアリングと視察）、大規模草地の酪農の視察、豊富温泉天然ガス施設の視察、豊富温泉（入浴）
9月18日　豊富町定住支援センター（河田豊富町長のご講演、町政のヒアリング）、川島旅館（昼食、「観光業と地域づくりの取り組み」の講演）、酪農家・北崎農園（視察、酪農体験）

①

②

③

④

⑤

⑥

⑦

⑧

写真①役場担当者との政策ヒアリング。②サロベツ湿原でカヤック体験。③ヨガ体験。
④豊富町の風力発電施設。⑤ミラココの子育てサークル活動の講演。⑥牧場での搾乳体験。⑦豊富高校でのワークショップ。⑧ジンギスカンづくり。

◉総　括

本研修では、エネルギーや酪農・観光という産業だけではなく、教育や子育てという生活にも着目して幅広い内容を調査した。酪農や風力発電は現地で体感することで特性を理解できる。アトピー皮膚炎の湯治では、ヨガ体験や健康食事ともつながるヘルスツーリズムを体験した。

参加学生は、事前学習と質問票の作成、調査時の質疑応答と調査記録の作成、調査後の報告書作成とプレゼンという一連の調査方法を習得できたはずである。プレゼン報告は、経済学部報告会（12/20）だけではなく、他大学との合同ゼミ報告会（オンライン）を実施した（12/17）。その際、豊富町の関係者にもオンライン参加して頂き、研修の成果を還元した。学生にとって初めてのフィールド調査だったので、大変さもあったが、楽しさも実感できたのではないか。そして、4日間一緒に過ごすことで学生同士が仲良くなったことも大きな成果である。

課題としては、毎年のことながら、どうしても個別テーマの現状把握に時間がかかるため、先行研究を十分にサーベイできず、より深い考察を行えなかったことがあげられる。次年度の地域研修では、学術研究に近づけた研修を実施したいと考えている。

学生研修記

大泉 龍斗
経済学科２年
とわの森三愛高校出身

ヘルスツーリズムに魅力をもつ豊富町

地域研修で印象に残ったことは、豊富町のエネルギー環境についてである。豊富鉱山の天然ガスの温泉の活用や、地形を上手く利用し建設された風車を間近で見ることができ、風力送電の施設だけで豊富町全域の電力を賄える規模と知り驚いた。また、豊富温泉の川島旅館の女将さんの話ではすべての施設でアトピーに効く温泉を有しているため、競合するのではなく互いに力を合わせて温泉街を盛り上げることに尽力しているという。湯治目的で移住してきたヨガ講師のまなみんさんらの話からも豊富町はアトピーを治すためだけではなく、心の健康を豊かにする地域性を感じた。

私の思う豊富町の魅力は、ヘルスツーリズムの充実性であると思う。豊富温泉を利用した「ミライノトウジ」という町の健康相談員や温泉コンシェルジュが常駐し湯治利用者のために温泉の効能を説明する講座があるのが魅力であり、強みであると思う。

佐藤 涼香
経済学科２年
天塩高校出身

地域資源を生かしたサービスや取り組みが充実

研修内容で印象に残ったことは、餅カフェわが家の堂脇さんの講話。堂脇さんの生き方に対する考え方だけでなく、人柄の良さに触れたのが今でも記憶に残っている。堂脇さんの講話を聞いて、自分の将来のビジョンが少し見えた気がした。

豊富の魅力は、地域資源を生かしたサービスや取り組みが充実していること。確かに小規模な地域であるため、様々な面で制限はあるが、その中でも「豊富温泉」を売りにして、湯治を目的とした地方から訪れる人向けの宿泊施設やサポートが町全体で行われている。さらに湯治のために他所から訪れた人がそのまま豊富町に移住し、地域振興を行っているケースが多いイメージがある。他にも、定住したくなるような、まだ私たちも知らない隠れた魅力があるのではないかと思った。

1部・2部
上園昌武ゼミⅠ・Ⅱ

参加学生数30名

上園 昌武
経済学科
教授

含翠園にて

岩内町の持続可能な地域づくり

研修地：岩内町

◉研修目的

岩内町は、過疎高齢化問題に直面しており、どのように持続可能な産業と地域づくりを展開していけばよいのかを問題意識にもって調査に取り組んだ。調査テーマを５つに分け（原発・核ごみ、農業、観光、歴史文化、町政・地域づくり）、実態の把握と提案づくりを目指した。

研修先・日程

8月7日　浄土宗帰厚院、地域子育て支援センター、荒井記念美術館、いわない高原ホテル社長の講演
8月8日　JAきょうわスイカ・メロンの選果市場、幌似 洞爺火砕流の痕跡地、泊原発と寿都核のごみ処分に関する講演、岩内郷土館
8月9日　岩内町役場にてヒアリング（木村町長・三浦教育長）、地域おこし協力隊員ヒアリング（アスパラガス農業）、含翠園、神仙沼（濃霧のため視察できず）

写真①浄土宗帰厚院住職の講話。②地域子育て支援センター。③JAきょうわのらいでんメロンの選果。④含翠園の庭園。⑤幌似 洞爺火砕流の痕跡地。⑥泊原発問題の講演。⑦郷土館の展示視察。⑧木村町長の講演。

◉総　括

岩内町は、農業・漁業、観光、原発が主要産業のまちである。かつては漁業で繁栄し、まちには歴史と文化の史跡が残るが、少子高齢化による過疎化が大きな課題となっている。本研修では、エネルギーや観光、農業という産業だけではなく、歴史文化や教育・子育てという生活にも着目して幅広い内容を調査した。これらの要素がより良い状態になければ、持続可能な地域を実現することが難しい。バラバラに見えるかもしれないが、参加者が相互につながっていることを理解していれば、地域づくりという観点での研修の意義があったと考えている。

本研修によって、参加学生は、事前学習、調査時の質疑応答と調査記録の作成、調査後の報告書作成とプレゼンという一連の調査方法を習得できたことが成果である。初めて地域研修に参加した2年生にとって、調査の楽しさと難しさを体感できたと思う。また、3日間一緒に過ごすことで学生同士が仲良くなったことも成果である。課題としては、現状把握に時間がかかったため、関連の学説や理論など先行研究を十分にサーベイできず、より深い考察を行えなかったことがあげられる。

学生研修記

小西 真歩
経済学科３年
岩見沢緑陵高校出身

岩内は自然が豊かで魅力あふれる町

今回の研修で初めて岩内町を訪れて、自然が豊かで魅力あふれる町であると感じました。海や山などの自然がそばにあり、絵の町と呼ばれるほど芸術文化がとても盛んであることがわかりました。郷土館での視察では、岩内町の歴史や文化について深く学ぶことができました。日本で初めてアスパラガスの栽培に成功したことや、ビールの主要原料である野生ホップが発見されたこと、北海道初の水力発電所が作られたことなど、岩内町の発祥や始まりのものが非常に多くあることに驚き印象に残っています。

また、ホワイトアスパラガスの栽培や義務教育学校の設立などといった独自の取り組みが行われていたので、こうした取り組みの認知度を高めていったり、まだ知られていない魅力をもっと発信していけたらさらに地域の活性化につなげていけるのではないかと思いました。今回の研修を通して岩内町の魅力や抱える課題や問題などを知ることができ、充実した研修になりました。

齊藤 百花
経済学科３年
北広島高校出身

岩内町の魅力は町の運営にある

私が印象に残ったことは、岩内町全体で地域の活性化を行い、町全体で積極的な町おこしの雰囲気があったことです。また、寿都町の核ゴミ問題の話はとても分かりやすく、何が問題なのか理解が深まりました。

岩内町の魅力は町の運営にあると思いました。私が岩内町民だったら町長や教育長の話を聞いてとても安心だなと思ったからです。教育の分野で新しい保育センターがあったり、小中一貫の学校ができる予定があります。補助金で住民を集めるのではなく魅力を感じて長く岩内町自体に愛着を持って長く住んでほしいという町長の方針がとてもいいと思いました。地域おこし協力隊についても、もともと興味があったので、話が聞けてよかったです。地域研修までは岩内町についてわかっていない部分が多かったのですが、多くの魅力を発信し町全体の運営を行っているのだと感じました。

1部
牛久晴香ゼミⅡ

参加学生数15名

牛久 晴香
地域経済学科
准教授

牛久ゼミの面々

ニセコに学ぶ多文化共生と持続可能な街づくり

研修地：ニセコ町

◉研修目的

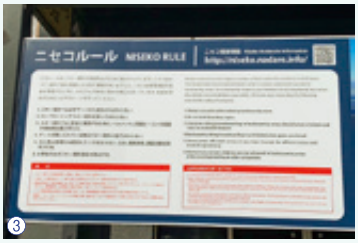
ニセコ町は外国人観光客・居住者が多く、国際理解教育や国際交流事業を積極的に展開する自治体として知られている。他方で、ニセコ町には観光公害や物価上昇、労働力不足や若者の町外流出などの課題もある。本研修では文化・社会・経済的な違いを乗り越え、地域に関わるすべての人にとって住みよい街を作るにはどうすればよいのかをニセコ町を事例に考える。

研修先・日程

8月14日　ニセコビュープラザ、ニセコ町役場
8月15日　ニセコ市街地でフィールドワーク
8月16日　ニセコアドベンチャーセンター

①

②



③

④

⑤

⑥

⑦

⑧

写真①開発中の土地と羊蹄山。②ニセコ町幼児センター斎藤徹氏。③ニセコルールを掲示した看板。④ニセコの観光地を巡回する定時バス。⑤ニセコ駅前。⑥さまざまな観光パンフレット。⑦英語で書かれた不動産の看板。⑧ニセコ町との事業提携で作られた八海醸造・ニセコ蒸溜所。

◉総　括

本研修では、外国人観光客や多様なルーツをもつ居住者が多いニセコ町を事例に、社会・文化・経済的な違いを乗り越え、地域に関わるすべての人にとって住みよい街を作る方法を探ることを目的とした。初日は、山本契太副町長から共生に関する町の取り組みについてご講演いただいた。事前学習では「観光公害」や外国人と日本人の対立といった課題に注目していたが、意外にも現場では大きな問題とは認識されていなかった。住民同士の対話や、幼少期から多文化に触れる環境が整備されていることで、文化や言語の壁が時間とともに克服されてきたというお話が印象的であった。地域おこし協力隊との懇談会では、ニセコ町の魅力や生活上の問題についてご自身の経験にもとづくさまざまなお話を聞くことができた。隊員の方々の親しみやすいお人柄もあり、学生からの質問も絶えず、1時間以上におよぶ活発な意見交換が行われた。翌日は班に分かれてニセコ町幼児センターや比羅夫地区の観光事業者などを訪問し、住みよい街づくりや国際観光の発展に関する具体的な取り組みを学んだ。最終日にはニセコアドベンチャーセンターを訪問し、アクティビティに参加しながらガイドの方々に移住経緯などを伺った。本研修は外国人と日本人という二項対立的な視点を問い直す契機となった。研修にご協力いただいたすべての方々に心よりお礼申し上げる。

学生研修記

ニセコ町が目指す共生のかたち

長谷川 暖
経済学科３年
小樽桜陽高校出身

私たち牛久ゼミⅡでは、「多文化共生と持続可能なまちづくり」というテーマを決め、グローバルイシューから考えられる将来像や政策を調査する為に、ニセコ町で三日間の地域研修を行いました。その中で多文化共生・オーバーツーリズム・持続可能なまちづくりの３グループに分かれ、自治体の活動や住民の意見、課題等について町役場でお話を伺いました。私がこの研修で驚いたのは、ニュースや記事で伝えられている「物価の高騰や外国人による景観の破壊」という観光問題のイメージが、実際とは異なることです。ニセコと観光客は切り離せない関係にあり、物価の高騰は開発地のごく一部で、少なくとも住民の暮らしに大きな悪影響を与えていないという話は印象的で、伝聞と現地との乖離を知れたことが地域研修を行った意味であると思います。ニセコ町の魅力、自治体や住民の努力は現地に赴いたからこそ理解できたのだと思います。その上で新たに見えてくる問題を考察することも重要です。新たな視点でものを見るという点で、この研修では大変貴重な体験をさせて頂きました。

ニセコ町から学ぶ対話の重要性

森川 一輝
経済学科３年
札幌藻岩高校出身

地域研修では、ニセコ町役場職員の方々や地域おこし協力隊の方々からお話を聞くことができました。お話を聞いていくとニセコ町全体で対話を重視していると感じました。ニセコ町はパウダースノーが有名で、国内外から多くの観光客が訪れますが、スキー場外での滑走の事故が問題になった際には、場外滑走を禁止するのではなく、「ニセコルール」という独自のルールを設けることで、場外滑走の魅力の保護と安全性の確保の両立を果たしたと学びました。他にもより良いまちづくりを行うために子どもたちと意見を交える「子ども議会」が設置されるなど、様々な場面で対話が行われていました。昨今日本全体で観光客が増加し、オーバーツーリズムが問題視されていますが、ニセコ町で行われている対話こそが、問題解決の糸口になると私は考えました。そして、対話を行うためにはどのような環境が必要なのかを考えていかなければならないでしょう。

1部・2部
内田和浩ゼミⅠ・Ⅱ

参加学生数11名

内田 和浩
地域経済学科
教授

祝津パノラマ展望台にて

小樽市のまちづくりリーダーのライフヒストリー

研修地：小樽市

◉研修目的

本地域研修では、前期のゼミⅠ・Ⅱで学んだ質的調査法を用いて、小樽市におけるまちづくり（観光や商店街）のリーダーへのライフヒストリー法による聞き取り調査を行い、そのまちづくりへのプロセスを明らかにしようとした。

研修先・日程

9月17日　小樽市のまちづくりについて（小樽市役所別館4階第3委員会室）、小樽市街地をフィールドワーク(小樽運河周辺)、リーダーA・Cさんの聞き取り調査①（小樽市民センター5号会議室）、グループ学習（調査①の整理）(小樽市民センター5号会議室)

9月18日　グループ学習（調査①の整理）*A・Cさんグループ、リーダーBさんの聞き取り調査①（小樽市小樽市民センター1号会議室）、リーダーA・Cさんの聞き取り調査②（小樽市観光協会、利尻屋みのや）、グループ学習（調査①の整理）*Bさんグループ（市立小樽図書館視聴覚室）、グループ学習(調査①②の整理)（市立小樽図書館視聴覚室）リーダーBさんの聞き取り調査②北運河ナイトマーケット2024会場）

9月19日　グループ学習（調査②の整理）（小樽市小樽市民センター5号会議室）、小樽市周辺をフィールドワーク（祝津方面）

◉総　括

1日目は、午前中小樽市役所で担当課の職員の皆さんから「小樽市のまちづくり」の全体像についてお話しを伺うとともに、小樽運河周辺でのフィールドワークをおこなった。午後からは、観光協会と堺町商店街のリーダーであるAさん、Cさんから聞き取り調査を行い、そのライフヒストリーを分析した。2日目は、午前中は堺町商店街のリーダーであるBさんへの聞き取り調査を行った。午後からはAさん、Cさんへの2回目の聞き取り調査を行なうとともに、Bさんのライフヒストリーを分析した。そして夜に2回目の聞き取り調査を行なった。3日目は、午前中3人への調査全体の整理を行い、午後からは祝津地区でのフィールドワークを行なった。

学生たちはこれらを通じて、人口減少・高齢化が進む観光都市・小樽市の地域社会の現状と観光まちづくりに取り組む人々と直接出会い、直接話を聞き、直接地域歩きをし、「まちづくり」とはどういうことなのか、リーダーとはどのように形成されていくのか理解することが出来たと思う。お世話になったすべての皆さんに感謝したい。

学生研修記

板橋 賢汰
地域経済学科2年
岩見沢東高校出身

地域研修に参加して

私たち内田ゼミナールは、一部・二部合同で小樽市での二泊三日の地域研修を行いました。一日目は小樽市役所を訪問し、総合計画や街づくりについて市職員の方々から貴重なお話を伺いました。また、この日から地域づくりのリーダーの方々に対するライフヒストリー調査を開始しました。私たちの稚拙な質問にもご丁寧に答えて頂き、誠にありがとうございました。二日目は、聞き取りした内容を精査し、その上で新たな質問をリーダーの方々にさせて頂きました。最終日には、聞き取った内容をまとめ、さらに小樽市内のフィールドワークを行うことにより、この地域に対する見識を高めることができました。大変有意義な研修を行うことができ、関係者の皆様方に心より感謝申し上げます。私個人にとっても、大学生活の良い思い出となる素晴らしい研修であったと思います。

仁木 伶和
地域経済学科2年
室蘭東翔高校出身

小樽市から学び取る地域研修

私たち内田ゼミは、2泊3日の地域研修で小樽市を訪れた。初日にはまず、小樽市役所職員に話を伺った。総合計画やまちづくりについての説明を受け、質疑応答を行った。次にグループごとに市内でフィールドワークをした後、まちづくりのリーダーにライフヒストリー調査を行った。ここでは、リーダーがまちづくりを行ってきた中で、どのような事例 を通して意識の変化があったか、2時間程度インタビューを行った。2、3日目はインタビュー内容を整理・分析し、聞き漏らしがあった際には再度インタビューを行った。また、初日同様グループごとにフィールドワークを行い、小樽市への理解を深めた。今回の地域研修を通して私は、ライフヒストリー調査の難しさを実感した。インタビューする際、時間に注意しつつもいかに聞きたいことを誘導せずに引き出すか非常に苦労した。

写真①小樽市市役所職員による「小樽市のまちづくり」説明。②Aさんへの聞き取り調査。③Bさんへの聞き取り調査。④Cさんへの聞き取り調査。⑤堺町通商店街でのフィールドワーク。⑥グループ学習（聞き取り調査の整理）1。⑦グループ学習（聞き取り調査の整理）2。⑧祝津でのフィールドワーク。

1部
大貝健二ゼミⅠ

参加学生数10名

大貝 健二
地域経済学科
教授

日高育成牧場にて

日高地方の軽種馬産業における外国人労働力と多文化共生

研修地：日高町、新ひだか町、浦河町

◉研修目的

本研修の目的は、次の２点である。第１に、国内最大の軽種馬生産、育成を行っている軽種馬産業の全体像を把握することである。第２に、厩務員不足に対して特定技能を有するインド人が急増している。多文化共生の取り組みをどのように進めているのか学ぶことである。

研修先・日程

9月10日　ホッカイドウ競馬（門別競馬場）、日高軽種馬農業協同組合
9月11日　浦河町役場企画課、浦河町日印友好協会
9月12日　JRA日高育成牧場

◉総　括

本研修で明らかになったことは、次のとおりである。第1に、軽種馬生産・育成の複雑な分業体制についてである。すべての自社内で行う大手がいる一方で、中小の軽種馬生産牧場や、競走馬としての育成を行う育成牧場が存在していることである。第2に、育成牧場で、軽種馬の世話をする厩務員が決定的に不足していることから、育成牧場が仲介業者を通じて、馬乗りの技能を有するインド人労働力を確保している。そのため、こうしたインド人厩務員が浦河町はじめ日高地方で急増している。第3に、インドから来た人たち、特に厩務員の家族が地域社会に馴染むために、浦河町ではユニバーサルデザインの導入など、「多文化共生」に向けた取り組みが積極的に行われている点である。とはいえ、浦河町役場が最初から多文化共生に関するノウハウを持っていたわけではない。手探りで試行錯誤を積み重ねるとともに、地域おこし協力隊として浦河町に赴任した稲岡さんの奮闘によって、ヒンディー語版の母子手帳の作成や外国人生活支援などが行われている。他方で、浦河町の多文化共生の取り組みを、いかに仕組みとして機能させていくかがこれからの課題といえよう。

学生研修記

中塚 涼太
地域経済学科２年
中標津高校出身

地域研修を終えて

私たちは、軽種馬産業とそれに伴い増加した外国人労働者について浦河町へ研修を行った。浦河町は全国有数の軽種馬産地であり、他産業と同様に人手不足が課題となっていた。しかし、外国人労働者としてインド人が激増しており、労働力として活躍している現状があった。この研修で理解した事は、軽種馬産業において、インド人が重要な存在になっている点だ。植民地時代にイギリスの競走馬を育成していたため、現在働いている人にも引けを取らない技術を持っていたのである。そのため、安易に国内で労働力を補うことは難しいのだと感じた。また、外国人の生活支援が厳しい点も印象的だった。支援の大半を行っていたのは地域おこし協力隊の稲岡千春さんであり、任期が終わった後にも生活支援を行えるように新しい人材育成が課題のように感じた。実際に現地へ調査を行うことで得られる情報は事前に調べたものとは違ってとても面白かった。この経験を今後の学びにも生かしたい。

山口 汐真
地域経済学科２年
札幌新川高校出身

地域研修を終えて

今回私たちは、外国人との多文化共生や産業を通しての地域活性化の方法を模索するために、近年軽種馬産業関連によりインド人が増加傾向にある北海道浦河町に訪問しました。ヒアリングを進めていく中で特に印象に残ったのは、浦河町では軽種馬産業に従事するために浦河町にやってきたインド人やその家族に対して、役場などが日本人との交流の場の設置や支援を行ってはいるものの、人材不足や産業との連携不足により支援や異文化交流がまだまだ足りていないということです。私たちはこの現状を打開するために、一つの案としてインド人への支援を増やし、かつ交流を促進させるために仕事に就いていないインド人女性の企業への就職支援の強化が必要であるのではと考えました。地域研修を通して、私たちは今まで考える機会の無かった社会問題に向き合うことができ、貴重な体験をすることができたと感じます。

写真①浦河町役場。②ホッカイドウ競馬。③日高軽種馬農協。④ユニバーサルデザインの導入。⑤多文化共生記事。⑥門別競馬場見学。⑦JRA日高育成牧場。⑧日高育成牧場。

①

②

③

④

⑤

⑥

⑦

⑧

1部
大貝健二ゼミⅡ

参加学生数８名

大貝 健二
地域経済学科
教授

山形地区振興協議会にて

過疎地域における廃校活用と地域コミュニティ

研修地：鳥取県八頭町、智頭町、岡山県西粟倉村、京都府京都市

◉研修目的

本研修の目的は次ととおりである。第１に、過疎地域における廃校活用の方向性を、過疎先進地域における実践から学ぶことである。第２に、廃校活用を通じた地域活性化について、その母体となる地域コミュニティや運営主体のスタンスを検討することである。

研修先・日程

９月３日　八頭町役場、大江ノ郷ビレッジ、隼Lab.
９月４日　西粟倉村安全第一公園、（株）エーゼロ、智頭町森のようちえん（西村さん）
９月５日　（株）皐月屋（大谷さん）、山形地区振興協議会（大呂さん）
９月６日　CCPT、ゼロイチ運動（寺谷さん）

◉総　括

本研修で明らかになったことは次の諸点である。第1に、廃校活用の多様性である。例えば、八頭町、智頭町においては、いわば民間活力を活用しながら、スタートアップやコワーキングの拠点のほか、宿泊施設として廃校に新たな息吹を吹き込んでいる。第2に、活用の仕方では同様であるが、そこに至るまでの意思決定プロセスについては、明確な違いがあることである。八頭町では、シーセブン隼や大江ノ郷がそれぞれ廃校を管理、活用しているのに対して、智頭町では、住民自治を基にして、地域住民による熟議を通じて方向性を決め、地域運営組織を中心に廃校を管理運営している。住民自治は、地域に対する危機感から生じたCCPTや（智頭町活性化プロジェクト）、ゼロ分のイチ運動から醸成されている。学校は廃校になっても地域社会のシンボル的存在である。企業活動の新たな拠点としての役割を担う一方で、地域住民の寄り合う場所でもある。その両者を融合するような活用の方向性が望まれる。

また、岡山西粟倉村は、ローカルベンチャーの全国的なモデルとして認識されている。廃校（旧影石小学校）はエーゼロの事務所のほか、エーゼロによるうなぎの養殖がおこなわれていた。

学生研修記

大木戸 駿佑
地域経済学科３年
札幌稲雲高校出身

地域研修を通して感じた人の温かさ

今年の地域研修は鳥取県、岡山県、そして任意で北海道道南の４町村で行った。

４つの町村が企業・行政・住民の各方面からどのように地域の取り組みがなされてきたかを役場や民間企業、地域運営組織の方々にヒアリング調査を行った。

異なる主体の地域での取り組みにより、地域内で雰囲気に差異があった。行政や企業が主体的に取り組む地域では利潤や事業創出などの経済的な話が多いのに対し、住民が主体的に取り組んでいる地域では、人の繋がりや温かさを感じられた。

訪問した際、調査内容に加えて出身や趣味、将来の夢など色々な話を親身に聞いて下さり、受け入れてえている温かさを感じた。「こんなにも大人を凄いと思ったのは初めてです」と先生に言ったほどで、とても幸せな時間だった。主体的に物事に取り組みお互いにコミュニケーションを欠かさなかった結果がこの温かさを生み地域における人の繋がりの重要性が分かる研修となった。

鹿谷 茜里
地域経済学科３年
札幌白石高校出身

４泊５日の地域研修を通して得られたこと

地域研修では、地域づくりにおける廃校活用、地域コミュニティというテーマで、現地で役場、振興協議会などの地域づくりに携わった方、廃校活用施設の運営を行っている方にヒアリング調査を実施した。

調査を通して、地域づくりは地域による運営主体、その方針など地域における考え方や地域課題へのアプローチなどの形が大きく異なっていることによって地域づくりに対しての課題の取り組み方が違うということが分かった。調査では実際にどのようにして廃校活用がなされたのか現場を見せていただいたことで、実際にその地域が持つ問題点などが浮かび上がっていった。各地域によってその課題は様々であるが、共通して挙げられるのは地域住民が地域に対して共通の意思を持っているのかが重要というように考えられると感じた。

地域研修を通して、私は地域づくりにおいては地域住民の考えと自治体の考えを一致させて取り組みを進めていくことが大切だと思った。

写真①(株)エーゼロ。②ナギノ森ノ宿。③安全第一ホテル。④安全第一公園。⑤山形地区振興協議会。⑥大江ノ郷ビレッジ。⑦廃校を活用したホテル。⑧隼Lab.。

①

②

③

④

⑤

⑥

⑦

⑧

1部
佐藤信ゼミⅠ

参加学生数14名

佐藤 信
地域経済学科
教授

コープさっぽろエコステーション前にて

コープさっぽろの事業経営と地域貢献を学ぶ

研修地：江別市・札幌市

◉研修目的

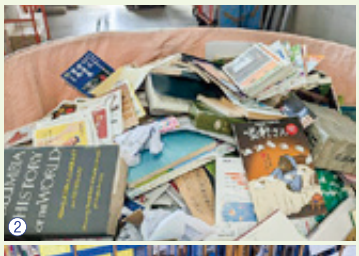
コープさっぽろは道内でも最先端の物流施設やリサイクル施設を有している。研修では、物流拠点である関連会社(江別市)やトドックエコセンター等を訪問し、北海道全域を対象とした物流システムの特徴やリサイクルの現状や意義について学習することにした。

研修先・日程

9月26日　(株)北海道ロジサービス　コープさっぽろエコセンター・エコステーション　コープさっぽろトドックステーション新川センターコープさっぽろ西宮の沢店

写真①黒いトレーをペレットに加工。主に燃料として使われる。②本類も回収するようになった。③トドックステーション新川センターでは組合員から廃油を回収。④新川センターで説明を受けているゼミ生。⑤西宮の沢店の全景。⑥西宮の沢店の中の資源回収ボックス。⑦西宮の沢店の中にあるペットボトル回収機と回収箱。⑧北海道ロジサービスにおける宅配トドック用ボックスへの積み込み。

①



②

③

④

⑤

◉総　括

コープさっぽろは、北海道の８割以上の世帯が組合員であるとともに、全国第２位の供給高を誇る巨大生協である。その事業は、店舗や宅配、移動販売にとどまるだけではない。組合員から出される紙パックや廃油などの資源を回収し、リサイクルを行ういわゆる静脈流通も事業化している。そこでゼミでは、物流拠点となっている北海道ロジサービスをはじめとして、エコセンター（回収工場）・エコステーション（教育施設）の視察を行い、回収される諸資源の再生利用方法について学習した。次いで、宅配トドックの拠点の一つであるトドックステーション新川センターを訪問し、倉庫内を視察するとともに地域住民の居場所となっている保育施設を視察した。コープさっぽろ西宮の沢店では、建物の構造部に木材を使用していること、ＬＥＤ照明や開放的な天井で省エネを実現していることを知った。学生たちはコープさっぽろのアルバイト経験者や実家が組合員であるものが多いが、今回の研修を通じて、コープさっぽろの事業経営の先端的な取組みを改めて学ぶことができたと思われる。

地域研修において日程調整や当日の対応にご協力して下さった方々に深く感謝いたします。

学生研修記

木村 真菜
地域経済学科２年
北広島高校出身

松浦 みずき
地域経済学科２年
北海学園札幌高校出身

コープさっぽろが意識している取組み

今回の研修では、物流施設やエコセンター、宅配トドックや店舗と、様々な視点からコープさっぽろについて学びました。コープは宅配や店舗があるだけでなく、組合員の元に届くまで沢山の職員が関わっていることや、環境保全に取り組んでいることを知りました。その中でも、人と人との繋がりを大切にしている点に感銘を受けました。

生活協同組合であるコープさっぽろの最終目標は利益の追求ではなく組合員の生活の向上です。配達時に安否確認をする等、お客様とコミュニケーションを取るところに温かさを感じました。また商品のお届け時に資源を回収しエコセンターで修理・分別するという流れがあるのですが、組合員がルールを守ってくれるためきれいな状態で回収できているそうです。これらは職員と組合員の関係がいいからこそできることであり、人と人との関わりが重要であることを再認識する研修になりました。

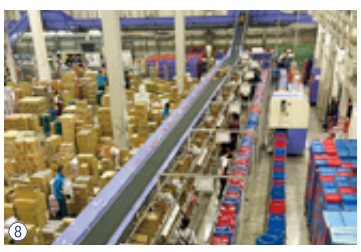
北海道におけるコープさっぽろの取り組み

今回の研修では、多くの発見がありました。特に印象的だったのはロジセンターの物流システムです。最新技術が導入される一方で、人々の手による仕分けが行われている様子を目の当たりにし、物流の重要性と支え合いを学びました。

エコセンターやエコステーションでは、地域住民や協同組合が積極的にリサイクルや環境保護に取り組む姿、トドック新川センターでは地域密着型のサービスが住民の生活を支え、特に、宅配サービスを通じ組合員との交流がコミュニティの結びつきを強めていることや、新たに子供が生まれた家庭へ子育てに必要なものを提供するサービスなど、素晴らしい循環だと感じました。この研修を通し、実際の業務の流れや環境への配慮について理解し、持続可能な物流システムの必要性を強く感じました。また、協同組合は私たちの生活に深く関わっていることも研修に行ったからこそ知ることができました。

⑥

⑦



⑧

1部
佐藤信ゼミⅡ

参加学生数15名

佐藤 信
地域経済学科
教授

旧増毛駅前にて

留萌南部における交流人口増加の取り組みと生協による生活サポート効果

研修地：小平町・留萌市・増毛町

◉研修目的

当ゼミでは、小平町・留萌市・増毛町（いずれも留萌振興局）における人口減少に伴う諸問題を知るとともに、社会的人口増加に向けた対策を明らかにすることを課題とした。同時に、コープさっぽろの店舗や移動販売車の利用者調査を通して住民生活と同生協の関係を知ることとした。

研修先・日程

8月21日　1・2班：小平町（小平町役場・町内商店・小平町商工会・移動販売車）
3班：小平町（旧花田家番屋・小平町観光交流センター・化石堀り体験）
4班：小平町（旧花田番屋）、留萌市内でモエクル体験）

8月22日　1・2班：留萌市（コープさっぽろ留萌店）、増毛町内視察
3・4班：増毛町（町内でヒストリーラリー体験・国稀酒造）
留萌振興局内会議室

◉総　括

ゼミでは、大きく４グループに分かれ、留萌南部の３市町にある諸機関への聞き取りや体験活動を通して、社会的人口増加もしくは交流人口増加に向けた取り組み内容と今後の課題を明らかにすることにした。あるグループでは、コープさっぽろの移動販売車や店舗を利用する地域住民の声を聴き、人口減少地域における生協の役割を明らかにした。

また、他のグループでは、化石の発掘体験（小平町）や自転車によるポタリング（留萌市内）、歴史的建造物の視察やスタンプラリーといった体験も行った。

人口減少がすすむ農山村地域に普通に見られるように、人口の下支え対策はなかなか実現が難しいが、地域資源を活かした熱心な活動も印象的であった。また、コープさっぽろの移動販売車や店舗は、買い物難民になりつつある高齢者の居場所機能、コミュニティの場として存在していたことを確認した。

なお、この調査の設計から実施にあたって留萌振興局およびコープさっぽろ全面的な協力を得ました。協力をしていただいた関係者に深く感謝するものです。ありがとうございました。

学生研修記

小平町でのコープさっぽろ移動販売車の意義

伊藤 萌望
地域経済学科３年
札幌北稜高校出身

私たちは地域研修で留萌市、増毛町、小平町の留萌管内南部を訪れました。私が特に印象に残っているのは、小平町で視察したコープさっぽろの移動販売車です。小平町は、人口減少により小売店が少なくなってしまったため、住人は、近隣の市町村にあるスーパーまで買い物に行かなければなりません。しかし、事情があって出かけることが困難な人が、移動販売車を利用しています。そこでは、販売員と利用者間でコミュニケーションがとられ、信頼関係が築かれていることが印象的でした。移動販売車には、レギュラー商品と販売員の方が独自に車に乗せる商品があり、利用者の傾向に応じて乗せる商品を変えていると言われたことが印象に残りました。また、移動販売車内で代行収納を行うことができ、出かけるのが難しくなっている利用者にとって、とても便利で、なくてはならない存在になっていると感じました。

地域研修を終えて

鶴田 琴
地域経済学科３年
千歳高校出身

地域研修で、小平町と増毛町を訪問しました。小平町は、クビナガリュウという恐竜の化石が発掘された場所であり、この化石は、文化交流センターに展示されています。文化交流センターには、アンモナイトやホタテなどの化石も展示されています。私たちは実際に化石がとれる河川へ行き、化石発掘体験をしました。化石が入っていそうな石を見つけて、ハンマーで叩き割るのは、とても楽しかったです。化石が発掘されたということはとても貴重なことですが、化石にまつわる商品は無いというのはもったいないと思いました。グッズ化をすることで、もっと多くの人に知ってもらえるのではないかと感じました。増毛町では、ヒストリーラリーの体験をしました。決められたスポットに地図を見ながら行き、キーワードを集めると景品がもらえるというものです。坂は上るのが大変でしたが、海が見える眺めの良いところもあり、歴史を学びながら楽しく運動ができました。今回の地域研修で、小平町と増毛町の歴史や魅力、課題に触れることができ、貴重な経験になりました。

①

②

③

写真①小平町道の駅。②体験移住用の施設ちょい蔵。③留萌振興局内会議室で意見交換。④移動販売車の利用者へのインタビュー。⑤移動販売車の中。⑥留萌市黄金岬の夕日。⑦化石堀体験（小平町達布）。⑧モエクルに乗ってサイクリング（写真は留萌振興局提供）。⑨増毛町内ヒストリーラリーのポスター。

④

⑤

⑥

⑦

⑧

⑨

1部・2部
土橋康人ゼミⅠ

参加学生数19名

土橋 康人
地域経済学科
准教授

帯広市 森の交流館前にて

帯広市から考える多文化共生社会への道

研修地：帯広市

◉研修目的

「移民」の流入が加速する中で、焦眉の問題となるのが多文化共生政策である。森の交流館・十勝は JICA 国際協力感謝賞を受賞するなど、その取り組みが高く評価されている。この森の交流館を中心とした調査から、多文化共生政策の現状と課題に迫ることが本研修の目的である。

研修先・日程

9月19日　JICA北海道（帯広）にて研修
　　森の交流館・十勝にて研修
9月20日　帯広市内研修
　　池田町内研修
　　音更町内研修

◉総　括

グローバル化の象徴とも言える移民の増大は、数多くの国の政治経済を揺るがし、世界が直面する最も困難な問題の一つを生み出している。このさざ波は、北海道にも静かに到達し、徐々に大きな奔流へと変貌しつつある。かかる状況で注目を集めているのが多文化共生政策であり、外国人および自国民に対する支援と「教育」、そして異なる「文化」の尊重と「保存」がその柱となる。

帯広市が行う多文化共生への取り組みは、外国人に対するサポートと日本国籍を持つ住民への異文化交流機会の提供を主眼とするものであった。限られた人員と資源の中で、多様な取り組みを自ら考案し、実行していく体制は高く評価できるだろう。また、インターナショナル協会や教育機関などと連携した機動的かつ柔軟な施策は、他の自治体へのロールモデルとなり得る。その一方で、課題も山積している。人員と財源制約はその最たるものであり、途切れのない「移民」流入は、自治体や関係団体の努力によって建立された防波堤を決壊させかねないのが現状だ。求められる政策は、国や複数の自治体および関係諸団体が連携して必要な資金と人材を捻出し、帯広市のような「成功事例」を敷衍しながら、多様な人々が共存可能な社会に向けた諸策を遂行する体制作りであろう。

学 生 研 修 記

石脇 友怜愛
地域経済学科２年
室蘭東翔高校出身

地域研修を終えて

今回、土橋ゼミでは「多文化共生社会の現状と課題」をテーマに、多文化共生への取り組みが高く評価されている帯広市にて研修を行いました。研修では、森の交流館・十勝を中心に調査を行いました。その中で、2023年に帯広市が実施したアンケートによって示された、在留外国人が抱く生活ルールに対する不安やニーズについて理解できました。また、情報発信不足などの課題に対する新たな事業展開についても学ぶことができ、とても有意義な研修になりました。この調査を通じて、様々な国際交流事業の詳細を知り、帯広市が注力する「対面式」イベントの重要性を再認識しました。そして帯広市を参考にすれば、札幌や他の地域でも国際交流の更なる推進を図れるのではないかと感じました。今回の研修は、多様なバックグラウンドを持つ人々が共存する社会について考える良い機会になりました。今後、さらに多文化共生社会についての考えを深めていきたいと思います。

加我 哲大
地域経済学科２年
札幌光星高校出身

帯広市における多文化共生のあり方

年々増加傾向にある外国人居住者への対応が迫られる中、本年の地域研修では「多文化共生」をテーマとしました。訪問先は、外国人居住者が比較的多い帯広市に所在する森の交流館・十勝を選択し、帯広市が取り組む多文化共生政策について調査を行いました。そして、この地域研修から得た知見を用いて、札幌市の今後のあるべき多文化共生への取り組みについて考察しました。

森の交流館・十勝の職員に対するヒアリングからは多くの情報を得ることができました。具体的には、在留外国人の現状や外国人人材を受け入れることのメリットとデメリットです。その中で、住民の相互理解を促進するためのイベントや日本語教室などの取り組みについて学ぶことができました。そして、帯広市が抱える多文化共生社会への課題（法律や制度の違い、人材や財源の確保、在住外国人への情報発信など）を学べたことは、今後の札幌市の多文化共生政策に対して多くの示唆を与える発見になりました。

写真①帯広市 森の交流館にて。②帯広市 経済部観光交流課国際交流係 佐藤氏による講演。③帯広市 国際交流員による質疑応答。④帯広市 国際交流員による質疑応答。⑤帯広駅前にて。⑥音更町にて。⑦JICA北海道（帯広）にて。⑧池田町にて。

1部
中囿桐代ゼミⅡ

参加学生数 5名

中囿 桐代
地域経済学科
教授

ゼミ写真

LGBTQ の人が置かれている現状と日本における制度の課題

研修地：札幌市

◉研修目的

2023 年 6 月に LGBTQ 理解増進法が施行されたが、多くの課題が指摘されている。研修では、当事者 S さんにインタビュー調査を行い、抱えている課題について理解を深めた。さらに当事者団体の交流イベントを共催している Youth+ センターの見学も行い、今後必要な施策を考察した。

研修先・日程

10月4日　当事者Sさんインタビュー
12月1日　Youth+ センター（札幌市若者支援総合センター）見学

◉総　括

昨年度末に学生の方からLGBTQをテーマに地域研修を行いたいと言われた時は、正直頭を抱えた。私がこれまで研究したことのないテーマであり、先行研究も驚くほど少なかった。そして何より私自身が当事者に会ったことがなかった。教員としての私の第一の課題は当事者にたどり着くことであった。私は岩見沢市男女共同参画推進委員会の委員を務めており、幸いにも岩見沢市で講演を行った当事者Sさん（北海道で当事者支援を行う一般社団法人にじいろほっかいどう事務局長）を紹介してもらうことができた。これがなければ、当事者にインタビューすることもできなかったであろう。私自身もSさんから多くのことを学んだ。昨年国会で成立した理解増進法の内容も非常に不十分である。「不当な差別を禁止する」と書かれているが、そもそも差別に不当じゃないものがあるのだろうか？　挙句の果てにはこの法律ができると「心が女と言えば誰でも女湯に入れる」という誤った言説まで広まり、バッシングが起きている。今求められるのは「理解増進法」ではなく「差別禁止法」である。G 7 の中で差別禁止法がないのは日本だけである。「同じスタートラインに立てない、マイナスからのスタート」とSさんは語る。誰もが同じ権利を行使できるよう、職場、地域社会、国の対応が必要であり、日本に連綿と残るホモソーシャルな社会を変える必要がある。

写真①ゼミでのKJ法の実践。②Youth+ センターのスタッフのインタビュー。③センターの受付。④センターのお菓子のクレーンゲーム、無料です！。⑤センターの書架、LGBTQ 関連本の紹介。⑥センターのボードゲーム、利用者とスタッフの会話のきっかけになる。⑦センターのトイレの掲示。⑧にじいろほっかいどうパンフレット。

①

②

③

学生研修記

LGBTQ当事者の抱える「生きづらさ」

秋葉 慶悟
地域経済学科３年
江別高校出身

私たちは「LGBTQ理解増進法」について学び、当事者はこの法律についてどう思っているのか、生活はどう変わったかを知るため、当事者への差別や偏見、社会的な孤立をなくす活動を行ってる「にじいろほっかいどう」のSさんからお話を伺い、後日札幌市のYouth＋に訪問しました。Sさんから語られた内容から理解増進法では生活があまり変わってないことがわかりました。それは、この法律には差別禁止という文言がなく、あくまで努力義務であることが原因でした。「なぜ差別禁止と言い切らないのか。子供には差別は良くないと教えるのに、なぜ大人がそれを実行できないのか」と思いを語ってくれました。そのほかにも当事者の生活に関わる面で苦労が多いことがわかりました。性別適合手術や定期的な通院にはお金がかかりそれに対する保険や職場の手当てがまだ万全ではないことを語ってくれました。そのなかで特に印象に残ったことは「スタートラインが違う」という言葉でした。この研修を通じて差別禁止の法律を作り、当事者が法で守られ暮らしやすくするべきだと思いました。

地域研修を終えて

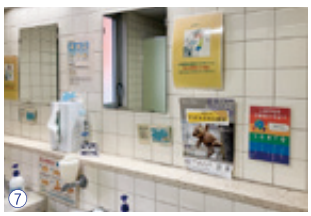
畑 颯馬
地域経済学科３年
札幌新川高校出身

私たちは、札幌市若者支援施設「Youth+」を訪れ、LGBTQを巡る制度や支援の是非についてパートナーシップ制度や医療にかかる費用を中心に当事者の方からお話を伺いました。当事者の方のお話から、現在のパートナーシップ制度で認められる権利は法律婚と比べて非常に少なく、「自分らしく」生きていくこととは程遠い制度であることがわかりました。また、ホルモン治療に保険が適用されていないことから、性別適合手術やホルモン治療に多額の費用を必要とし、それらを必要としない人と同じ「スタートライン」に立つことができないことが分かりました。研修を通して、LGBTQの方が自分らしく生きられるようになるためには、パートナーシップ制度の改善や道単位での適用、医療の保険適用などが必要であることが分かりました。加えて制度の改善以外では、Youth+やにじいろほっかいどうなどの支援の輪を広げ、自分たちも含め多くの人が当事者の想いを正確に知り、アライ（当事者を理解し、支援する人）を増やす事が必要であると認識しました。

④

⑤

⑥



⑦

⑧

1部
西村宣彦ゼミⅠ・Ⅱ
芽室班

参加学生数14名

西村 宣彦
地域経済学科
教授

芽室町役場でのレクチャー後、役場の皆さんと

空き店舗を活用した地域共生社会づくり ～多世代交流イベント開催を通じた検証～

研修地：芽室町

◉研修目的

増加する空家・空地・空店舗スペースを有効活用し、地域における人と人のつながりを生む場を創出することで、これらの地域課題の解決の可能性を探る実証事業として、地域交流イベント「メムロノエン」を学生主体で企画・準備・開催し、取り組みの過程と結果を検証した。

研修先・日程

7月17日　第1回事前訪問（顔合わせ、挨拶回り、打ち合わせ）
8月7日　第2回事前訪問（染め物修行、挨拶回り、打ち合わせ）
8月19日　芽室町役場でレクチャー、協賛農家へのご 挨拶、空き家リノベーション講義、地域の皆さんと決起集会
8月20日　終日イベント準備（農作物の収穫・集荷、調理、子ども遊びの道具準備、ポップの作成など）
8月21日　地域交流イベント「メムロノエン」の設営・開催（終日）。夜、「メムロドリームライン（MDL、チャレンジピッチイベント）」に学生3名が登壇。
8月22日　撤収作業。振り返りのミーティング。幕別町の空き倉庫リノベーション施設「Makura showcase」などの見学

①

②

③

◉総　括

空き家問題への関心から、芽室町在住の野澤一盛氏（(一社)ドット道東理事）とコンタクトを取る中で、芽室駅前の空き店舗を改修した「ユナイトベース」の存在や、子どもの遊び場や子育て世代の交流の場の不足といった地域課題を知り、私達自身が「ユナイトベース」を借りて「多世代交流イベント」を開催し、空間活用の可能性を検証する企画を提案したところ、芽室の皆様から前向きに受け止めていただき、学生主体で企画を進めることになった。①飲食、②染め物、③子ども遊び、④広報の4班に分かれて、野澤氏につないでもらった地域の方々と連絡を取り合いながら準備を進め、7月と8月上旬には有志で2回現地を事前訪問し、対面での打ち合わせや準備を行う中で、協力と応援の輪を広げていった。イベント当日は広報・営業の努力の甲斐もあり、想定を上回る来場者で賑わい、地元の子どもたちや親同士の交流のほか、協賛いただいた農家や飲食関係者、役場職員や議員の方にも足を運んでいただき、様々な交流が生まれた。地元からは、大学生のいない町の中高生が大学生と交流できたことも評価していただいた。大学生の挑戦を温かくサポートして下さった地域の皆様に感謝するとともに、自分達の限界を超えて挑戦した学生達にも敬意を表したい。

学生研修記

作左部 実李
地域経済学科2年
小樽双葉高校出身

チャレンジする人を応援する芽室の魅力と可能性

学生主体でイベントを開催することになり、最初はわからないことも多く、戸惑うこともありましたが、芽室町の皆さんが私たちの提案や依頼を快く受け入れてくれて、地域の方々と多くのつながりを築くことができました。普段は人見知りで、新しい環境に馴染むのに時間がかかる私ですが、地域の方々の熱い気持ちや地元愛に触れて、積極的に交流を重ねることができました。イベント当日の来場者の中には本学の卒業生の方もいて、共通の話題で盛り上がりました。今回の挑戦は私たちにとってはもちろん、芽室町にとっても有意義だったと言っていただき、「チャレンジする人を応援する」という芽室町の特性を実感しました。研修を通じて、人とのつながりの大切さや地域交流の場を作ることの意義を改めて認識するとともに、芽室町の魅力を深く知ることができ、大学生として自分の可能性を広げることができたと感じています。この経験を今後の活動に活かしていきたいです。

川村 奈実
地域経済学科3年
札幌月寒高校出身

信頼を築くことと行動力の重要性

私は広報班チーフとして、多くの人をイベントに誘致することを目標に、チラシの配布や公式Instagramの運営を中心に取り組みました。紙媒体とSNSを併用することで、幅広い世代にイベントの情報や魅力を効果的に発信できました。役場の方のご協力を得て、小学校や幼稚園など1,500名以上にチラシを配れたことも、多くの子どもたちが遊びに来てくれる結果につながりました。この活動を通じて学んだことは、信頼関係の構築と行動力の重要性です。芽室町の方々と関係を築く際は、ただ企画書を準備して説明するだけでなく、自らの熱意を行動で示すことが信頼を得る鍵だと実感しました。特に事前準備で何度も町に足を運んだことが、地域の皆様からの信頼につながり、たくさんの方々に協力・応援していただけた大きな要因になったと感じました。どんな環境でも自分の行動や姿勢が周囲の信頼を得る基盤になるということは、今後、社会人になっても活かせる大切な学びとなりました。

写真①イベント開催告知チラシ。②協賛農家・藤井農場を訪問。
③協賛農家・高野農場でミニトマトを頂く。④イベント会場で前日準備。⑤イベント開始ともにたくさんの子どもたちが来場！。
⑥染め物体験コーナー。屋外の空き地で開催し大盛況。⑦参加型アート「小さな水族館」。⑧「メムロノエン」飲食提供ブースで町民の方と交流。

④

⑤

⑥

⑦

⑧

1部
西村宣彦ゼミⅠ・Ⅱ
留萌班

参加学生数12名

西村 宣彦
地域経済学科
教授

40kmサイクリングを走り終え、「道の駅るもい」に帰還

「道の駅」を拠点とした観光まちづくりの展開

研修地：留萌市など

◉研修目的

1990年代に道路交通の休憩機能として誕生した道の駅は、グルメや直売等の魅力を備えた「旅の目的地化」段階を経て、近年は地域の暮らしを支える「地方創生の拠点」に進化しつつある。本研修では2020年に開業した「道の駅るもい」に注目し、留萌の観光まちづくりの現状・課題・可能性を考えた。

研修先・日程

8月26日　留萌管内の道の駅見学（羽幌・苫前・小平）
8月27日　「道の駅るもい」施設見学、留萌市役所・留萌観光協会・留萌開建・萌え天（シーニックバイウェイ・ルート事務局）のレクチャー ロゲイニング体験、中西留萌市長表敬、地域交流会
8月28日　サイクリング体験（留萌ダム往復）市場巡り、交流BBQ
8月29日　振り返りミーティング、「FMもえる」に生出演（番組ジャック）

写真①道の駅に隣接する舟場公園に到着。②留萌市地域振興部長・海野聡さんのレクチャー。③④まちあるきアクティビティ・ロゲイニング体験。前田一歩園創始者・前田正名氏の銅像。⑤岩萌観光協会会長・佐藤太紀さんの案内で「ちゃいるも」見学。⑥留萌ダム地下で貯蔵中の日本酒「国稀」を見学。⑦「FMもえる」で番組ジャック、生放送に挑戦。⑧2024年8月31日付北海道新聞に掲載。

①

②

③

④

⑤

◉総　括

「道の駅るもい」は2020年に深川・留萌自動車道の全線開通を受けて開業した。JR留萌本線の廃止を見据えて、新たな人の流れを呼び込むとともに、留萌管内全体のゲートウェイとして、観光振興や子育て支援等の機能を持つ「地方創生の拠点」の役割が期待された。私達が特に注目したのは、（株）モンベルとの連携による「アウトドア・ヴィレッジ構想」だ。道の駅に隣接する広い芝生の「船場公園」をキャンプ場として再整備し、様々なアウトドア・プログラムを提供して人を呼び込もうというものだ。私達は今回、サイクリングとロゲイニングを体験したが、前者は廃線跡、後者は遊楽トンネルなど、留萌固有の情景に触れた。広い緑地や古い町並みを、経済的価値を生む資本に変えていく複合的取り組みが、今後進むことが期待される。もう一つ注目したのが、道の駅に拠点を置くラジオ局「FMもえる」を核とした、地域内外の情報・人の発信・交流の取り組みだ。学生は研修最終日に、留萌での体験と学びを30分の生放送で話す機会をいただいた。また研修期間を通して撮影した動画を編集し、Youtubeでの留萌の魅力の発信も試みた。研修をサポートしていただいた関係者の皆様に心から感謝申し上げたい。

学生研修記

大田 結菜
地域経済学科２年
札幌北斗高校出身

道の駅からつながる市内の活性化へ

研修では「道の駅るもい」を訪れ、アウトドア体験などを通じて、留萌の魅力に触れました。事前学習では、近年の道の駅は「地域活性化の拠点」を目指していることを学び、留萌でも道の駅から市街地への人の流れを生み出そうとしていることを知りました。道の駅を起点に市内の観光スポットを巡るロゲイニングや、留萌の自然を満喫できるサイクリングを体験し、地域の魅力を深く感じることができました。また留萌市役所や留萌観光協会の方々との交流を通じて、地域の現状や取り組みへの理解を深めました。さらに大学生の視点で留萌の活性化に取り組める手法として、SNS用の動画の制作にも挑戦しました。私達自身も留萌のイベント情報などに触れる機会が少ないため、研修で体験したことを発信する動画を編集し、情報発信の手法やスキルを学びました。これらの活動を通じて、留萌の観光まちづくりの現状や課題や可能性について、深く考えることができました。

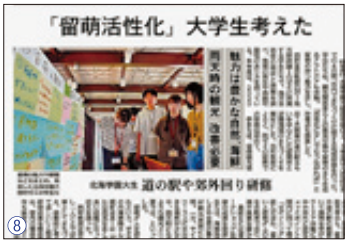
内海 朝陽
地域経済学科３年
羽幌高校出身

自然の力と住民の温かさから作る地域活性

地元の方や開発技術センターの方のサポートを受けて行った、サイクリングとロゲイニングのアウトドア体験が印象に残りました。サイクリングでは片道約20kmのコースの中に、かつて使われていた駅がそのまま残っていたり、川や山などの自然と常に隣り合わせで走れたり、普段の生活では味わえない体験ができました。そして改善した方がよいと思った点を地元の方などと共有するなど、留萌の観光の魅力向上を考える機会を持つことができました。ロゲイニングでは留萌市内の様々なところに行き、また地域の人と触れ合い、歴史や町について教えてもらうことで、留萌の魅力や住民の町を思う気持ちの温かさを感じました。研修を通して、市役所の方や地域の方は、道の駅のことだけを考えているのではなく、留萌の町そのものをよりよいものにしようという思いで取り組んでいることが伝わってきました。今後も「道の駅るもい」がどう進化していくのか、追っていきたいと思えた地域研修でした。

⑥

⑦


「留萌活性化」大学生考えた
⑧

1部
濱田武士ゼミⅠ・Ⅱ

参加学生数26名

濱田 武士
地域経済学科
教授

ゼミ生、参加モニターと沼田町長を交えた集合写真

過疎地に若者を呼ぶ着地型観光プログラムをつくる

研修地：沼田町

◉研修目的

北空知の沼田町では交流人口の拡大対策を進めている。その一環として、沼田町から依頼を受けて、昨年か引き続き（株）まちづくり沼田、地域創造コンサルタントGAROO（株）の協力を得ながら、ゼミ生達が着地型観光モデルのスタートアップに取り組んでいる。

研修先・日程

7月7日　ゼミⅠ（2年生）の沼田町視察
8月30日　沼田町で4つのグループに分かれ、ミッションを実施全グループでＢＢＱコンテンツの確認
8月31日　沼田町で4つのグループに分かれ、ミッションを実施
9月1日　研修室で実施内容の精査と成果報告
12月1日　モニター参加によるプログラム実験
2月26日　現地報告会

写真①沼田町長室（7/7）。②着地型観光プログラムのＢＢＱコンテンツの確認（8/30）。③トマトカレーの試作実験（8/30）。④明日萌駅の視察（7/7）。⑤雪景色を踏まえたバズり動画体験ツアーの様子（12/1）。⑥モニターが体験するトマトピザ体験の様子（12/1）。⑦ピザ班の集合写真

①

②

④

③

⑤

⑥

⑦

◉総　括

2023年度は、沼田町においてどのような着地型観光を取り組むことができるのか、トマト収穫、化石発掘、森林の自然カフェ、自然学校などの体験を通して4つのプログラムの素案づくりを試みて、現地でのワークショップを3度開催しブラッシュアップを図った。今年度は7月7日に2年生のみ現地訪問し、現地との協議によりプログラムを二つ（動画バズり体験ツアー、トマトピザツアー）に集約し、8月末の地域研修（の訪問）でプログラムを自ら体験し、さらに12月1にはモニターを募集して、有料モニタープログラム実験を行った。2年間を通して、現地調査、プログラムの素案づくり、専門家や地元の方々とのワークショップを通じたプログラムの評価・改善、そして有料プログラムの仕様設計から宣伝広報活動、現地案内までの実践を行った。産学官連携による開発プロジェクトを通じて、ゼミ生達は、行政の立ち位置や、沼田町の事業者の考え方だけでなく、着地型観光の事業化を進めるためのプロセスを学ぶことができた。学生だけで行うゼミ活動とは違って、社会実装の難しさと創造的作業の楽しさを体験できる貴重な機会となった。沼田町での最終報告会を2025年2月26日に行った。

学生研修記

名嘉元 一真
地域経済学科２年
北海高校出身

沼田町で着地型観光の実証実験

昨年に引き続き私たちは「GAROO」「まちづくりぬまた」と協力して地域資源を活用し、着地型観光プログラムを考えてきました。昨年度提案したものを今年は実行に移すためにより具体的な内容の精査と吟味を行ってきました。そして沼田町のトマトを使用した「ピザづくり体験」と沼田町の魅力をSNSの活用をとおしてバズらせるバスツアー「バズり体験ツアー」という二つのプログラムを軸にして計画を進めることになりました。計画を実行していくなかで一番難しいと感じたのは集客でした。ゼロからはじめた企画であったため認知度も低くSNSでの宣伝も困難を極めました。はじめの研修では集客ゼロで、研修終了後ゼミ生で企画の良かった点と改善案を出し合いました。そしてもう一度集客方法を見直し、プログラムの練り直しも行って再び企画を実行しました。結果的に見事参加者を獲得することができ、私たちのプログラムを体験してもらうことができました。このような経験を学生の頃にさせてくれたことに感謝します。

迎 雅登
地域経済学科３年
岩見沢東高校出身

沼田町における観光プランの社会実装に向けて

本ゼミでは「まちづくりぬまた」主導のもと、「GAROO」の方々にもご協力を頂き、沼田町における観光プランの社会実装を２か年で目指すという計画に携わりながら、着地型観光を学んでいる。２年目を迎えた今年においては、現地に２度赴き、９月は自分たちで観光プランを体験し、12月には一般客を募集して、プラン内容の評価を頂いた。９月の時点では、いかに自分たちが楽しむことができるかというサービス受益者の視点に立ちながら、昨年考案した観光プランを練り上げ、それを実際に体験した。12月には、実際にプランの運営側に回り、事前準備から当日に至るまでの活動を通して、観光サービスの提供者の視点を学んだ。来年度「まちづくりぬまた」が本プランを実践する。実装化に向けて、産官学の役割分担や運営の人手確保をどうするかなど、理想であるプランをどう実現段階にまで持っていくかを考えていくことが活動の焦点であった。この活動が、将来的に沼田町のためになることを願っている。

2部
西村宣彦ゼミⅠ・Ⅱ
濱田武士ゼミⅠ・Ⅱ合同研修

参加学生数16名［西村ゼミ16名、濱田ゼミ16名］

西村 宣彦
地域経済学科
教授

濱田 武士
地域経済学科
教授

豊浦町の移住政策と空き家対策－空き家と残置物の調査

研修地：豊浦町

◉研修目的

過疎地域では空き家が増加する一方、空き家流通を促すことで、移住者の増加につなげたいという意向がある。本研修では豊浦町などと協働し、空き家流通促進に資すると考えられる調査を実施し、調査の過程と結果を踏まえて、空き家対策の仕組みや体制をどう構築するかを考えた。

研修先・日程

9月14日　調査前ミーティング（町役場）
　　空き家調査
9月15日　空き家調査
9月16日　振り返りのミーティング（町役場）

写真①調査開始。空き家物件に移動。②③家主に聞き取り調査。④⑤⑥残置物調査。⑦⑧調査後のミーティング。⑨夕食カレーを自炊。

①

②

③

◉総　括

昨年に引き続き、豊浦町で空き家調査を実施した。事前学習では全国的な空き家問題及びそれに関わる対策を学ぶとともに、昨年の調査の成果と課題を踏まえて、豊浦町・北方建築総合研究所（旭川市）・大学／学生の3者で、今年の調査の内容・方法について検討・協議を重ねた。そして（1）①大型家財と②見込み有価物に対象を絞った残置物調査と、（2）調査に立ち会う家主への聞き取り調査を実施することとした。家主との調整は豊浦町が担った。また今年の調査は中古品売買や残置物処理に詳しいノースジーニアス社（札幌市）と西胆振の不動産事情に詳しいランディック社（伊達市）にもご協力いただいた。調査は2日間で9軒の物件を対象に実施した。（1）残置物調査では、①大型家財：242件、②見込有価物：103件の記録を行い、前者は搬出時の課題等も記入したほか、物件毎の大型家財の処分費用や見込有価物の買取額の見積もりを、ノースジーニアス社の協力を得て試みた。（2）聞き取り調査では、家主から物件や暮らしの記憶等のストーリーを聞き取り、物件の質的価値の析出を試みた。各物件の調査結果はデータシートにまとめたが、こうした資料は、空き家を手放す際に必要となる残置物処分費用の見積もりを容易化する可能性があるほか、調査のプロセス全体を通じて、家主の空き家処分への意思決定の背中を押す心理的効果を持つ（＝ナッジとなる）可能性がある。今回の調査を通じて、空き家流通の促進に向けて効果の期待できる取り組みや協働体制のあり方について、知見を深めることができた。両ゼミの学生達は、一連の活動に主体的に取り組み、過疎地域における空き家問題と課題解決に向けた探究活動を、我が身をもって体験し、豊浦町の人達の人情に触れながら、地域貢献に取り組むことができた。

学生研修記

角田 堅斗
地域経済学科２年
滝川高校出身

豊浦町の空き家流通の促進へ向けて

私たちは豊浦町で空き家の流通促進をテーマに、空き家の残置物調査と物件所有者への聞き取り調査を行いました。残置物調査ではSurvey123を用いて、①大型家財と②売却可能性のある見込有価物の計測を行いました。聞き取り調査では、豊浦町の空き家バンクへの登録を後押しすることを目的に、所有の経緯や売却意思、また物件や家族の「ストーリー」をお伺いしました。私が担当した聞き取り調査では、空き家バンクへの登録意思はありながらも家財処分の見通しを持てず、登録に至らないケースに直面しました。またご本人が住んでいたからこそ住まいへの思い入れがあり、空き家流通の促進を目指すだけでなく、新たな居住者を迎えることで元所有者のある種の心のケアにもなるように感じました。

今回の調査を通じて実際に空き家問題と関わることで、この問題の深刻さを理解するとともに、調査自体が空き家バンク登録を促す契機となることを学び、貴重な体験ができたと思いました。

田名部 航太
地域経済学科３年
釧路江南高校出身

進化した空き家調査

僕ら西村・濱田合同ゼミは、豊浦町で2泊3日の地域研修を行いました。3年生は昨年も豊浦町で空き家調査を行っており、2年目の調査でした。昨年は、敷地図の作成と空き家内に残る家財＝残置物の調査を行いましたが、残置物の数が予想以上に多く、調査に多くの時間を要したため、今年の調査では①処理費用が大きい家具などの大型家財と、換金可能性がありそうな見込有価物に限定しました。また空き家が所有者さんの手に渡った経緯や、今どういう状況なのかを知ることが重要と考え、今年は所有者さんへの聞き取り調査も行いました。調査を行ってみて、まず前回の課題だった調査に時間がかかりすぎる問題はクリアできました。また聞き取り調査を行ったことで、その家の歴史などを深く知ることができました。新たな課題も出てきましたが、前回よりいい調査ができたと思うので、来年以降さらにいい調査をして、日本の課題である空き家問題について考えていってほしいと思います。

豊浦町役場前で

図1 Survey123で送信した調査データ一覧（一部）

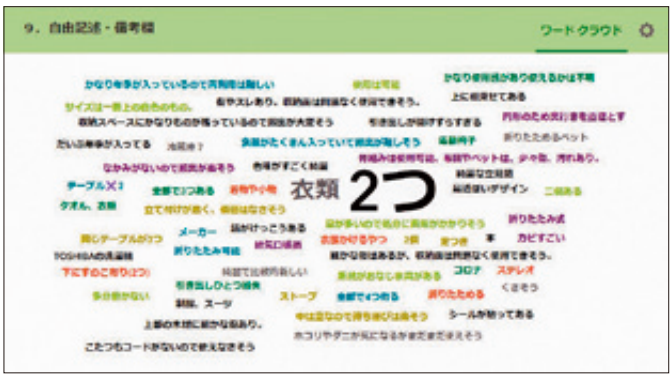


図2 調査結果（自由記述）のワードクラウド

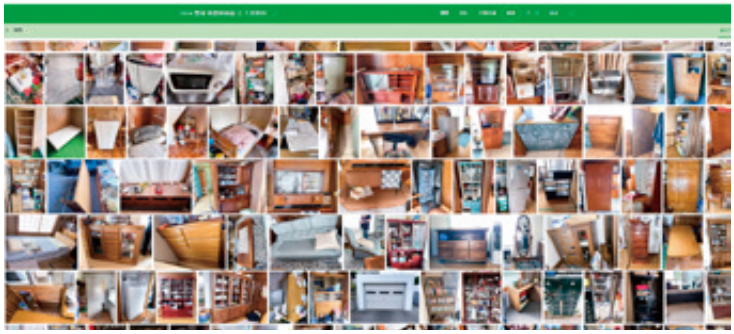


図3 残置物大型家財

学生研修記

上野 誠弥
地域経済学科２年
札幌丘珠高校出身

地域研修の空き家調査を振り返り

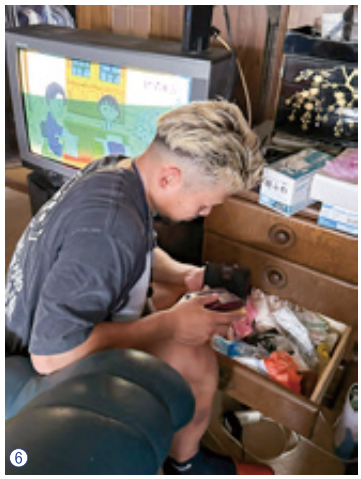
今回の地域研修は移住者に向けた空き家の流通や、空き家バンクの登録を促進させることを目的に空き家調査しました。研修内容は、空き家にある残置物の調査、不動産鑑定、そして所有者への聞き取り調査を行い、所有者に調査結果を報告することです。研修を始める前からノースジニアスや豊浦町の職員と話し合いをしたり、研修の調査方法やスケジュールについてのたたき台を行ったりしました。研修では空き家内部に入り、価値のあると思われる残置物の大きさ、傷や汚れの有無などを調べて写真撮影を行い、それらを記録して調査しました。初めて調査を行い、価値があると思ったものが価値がなかったり、記録する際にどこのメーカーが作ったのかがわからない物があったりして難しかったのですが、興味を持って研修を行うことができました。最後になりますが、地域研修を振り返って、実際に現地に行って空き家の実態を知ることができ、とても有意義な研修になりました。

佐藤 宇宙
地域経済学科３年
遠軽高校出身

昨年の調査を活かした地域研修

今回私たちは、昨年に引き続き豊浦町にて空き家調査を行いました。昨年同様空き家にある残置物のリスト化を行った他、今年からは残置物処理にかかる費用の査定や、価値のある残置物（有価物）のリスト化、実際に空き家の所有者となった方からの話をお聞きし、空き家となって物件を手放せない理由や、今後空き家をどのように活用していきたいかを聞き取る調査を実施しました。結果として残置物の処理には多額の費用がかかるものの、有価物も残されていたため、多少の費用削減が見込めること、調査でお会いした空き家の所有者の方は、活用や売却に興味関心があり、売却の話が進行中の物件もあるなどがわかりました。そして今回の調査から急な相続などによって空き家となる前に、情報を登録できる仕組みづくりなど、空き家になる前に対策を講じるべきだと考えました。昨年から空き家調査を行っていますが、全国的に見ればまだまだ前例のない調査を行っています。今回の調査結果も、同様に来年度に引き継がれ、さらに発展した調査となっていくでしょう。

⑤



⑥

④

⑦

⑧

⑨

1部・2部
平野研ゼミⅠ・Ⅱ

参加学生数 17名［Ⅰ部15名、Ⅱ部2名］

平野 研
地域経済学科
教授

ゼミ写真

北海道の企業・大学・行政における SDGsの取り組みについて

研修地：札幌市

◉研修目的

SDGs（持続可能な開発目標）は国連サミットで採択されて以降、その取り組みは世界的に拡大している。札幌市における行政機関や企業のSDGsを調べることによって、大学との連携の可能性を検討する。本学でSDGsに取り組む意義を考察し、具体的な実践を提案することが本研修での目的である。

研修先・日程

10月25日	RCE北海道道央圏協議会事務局長 有坂美紀さん
＜行政班＞	
10月16日	北海道庁総合政策部計画局計画推進課
10月18日	北海道地方環境事務所環境対策課
10月22日	札幌市環境局環境都市推進部／総務局国際部
＜企業班＞	
8月20日	日新堂印刷株式会社　阿部晋也さん
8月30日	北海道新聞社
10月24日	札幌テレビ(STV)
＜大学・市民班＞	
10月3日	フェアトレード雑貨&レストラン「みんたる」和田美加代さん
10月9日	北海道労働金庫
10月11日	北星学園大学
10月25日	北海道大学サステイナビリティ推進機構

写真①【行政班】北海道庁総合政策部インタビュー。②【行政班】北海道地方環境事務所インタビュー。③【企業班】日新堂阿部晋也さん。

①

②

③

◉総　括

本研修では、「行政班」「企業班」「大学・市民班」に分けて、多角的にSDGsの取り組みについて調査を行った。各班では、それぞれに調査目標を立て、調査先を選定し、インタビュー調査を行った。以下ではその成果について総括していく。

①行政班　「北海道地方環境事務所（環境省）」「北海道庁」「札幌市役所」に聞き取りを行った。国政レベルでは環境保全のための大枠が示されている一方で、地方自治体レベルでは地域に密着した取り組みが行われている。北海道庁では「北海道SDGs推進ネットワーク」などの企業・団体が参加し連携・協働する全道的ネットワークを構築している。札幌市は、内閣府から「SDGs未来都市」に選定された。それを契機に、市内高校生や道内外の大学と連携し、次世代とのSDGsの取り組みをするとともに、市内に水素ステーションを設置するなどし、再生可能エネルギー使用に本格的に取り組んでいる。行政での聞取りでは、道内においてSDGs5ジェンダー平等の取り組みが遅れているという共通見解があるという発見があった。

②企業班　長年に渡り地域に根差してきたメディア大手2社（道新、STV）と、エシカル（倫理的）な事業で成果を上げている新しい印刷会社（日新堂）を調査した。地域密着型企業では既にSDGs関連の事業に取り組んでいることが多く、それを各ゴールに当てはめて整理することから始められていた。道新では、関連する記事にSDGsマークを付けるようにしたところ、年間400～600記事にも及んだことは象徴的であった。STVでは、番組スポンサーにエシカルに関心の高い企業が増えたことによって、開始された取り組みがあることを知り、企業の行動原理への影響について

学生研修記

大学生でも取り組めるSDGsを

池田 琉人
地域経済学科２年
札幌新川高校出身

今回の地域研修では、私たちは大学班として活動し、最終的には、私たちが通う北海学園大学の中でもできるSDGsを見つけ、大学側に提案するという最終目標を立てて行動をしました。大学班の中でも二つのグループに分け、私たちのグループは北海道大学を訪問させていただきました。北海道大学には、サスティナビリティ推進機構という組織があり、「キャンパスマネジメント部門」、「SDGs事業推進部門」、「カーボンニュートラル部門」の３つの部門で構成されています。各部門でうまく役割分担がされており、取り組み内容の具体さやホームページの完成度の高さなど、驚くことが多かったです。特に、SDGsに関するホームページの作成は私たちの学校でもやるべきことだと感じました。北海道大学では、SDGs達成に向けた取り組みを通じて、持続可能な社会の実現を目指しています。また、学生やキャンパス全体を支援することで、未来に向けた発展的なモデルを構築しています。北海道大学の取り組みから、たくさんの参考にするべき考え方を学ぶことができました。

SDGs活動とフェアトレード商品

工藤 亜優人
地域経済学科３年
札幌光星高校出身

平野ゼミでは行政班・企業班・大学班に分かれ活動しました。私は大学班として活動し地域研修を行いました。

地域研修ではフェアトレード商品の販売・カフェの経営を行っているみんたると、北星学園大学へ取材に行きました。みんたるでは店内の販売だけでなく、フェアトレードマルシェや外のイベントでフェアトレード商品を販売しておりフェアトレード商品の偏見を無くす工夫が見られました。また大学祭や生協でも商品を販売しており大学との関わりが見られ、大学と専門店のつながりでより社会でフェアトレードが知られるのではないかと考えられました。

北星学園大学の取材では他大学のSDGs活動を詳しく知ることができました。北星学園大学では生協でフェアトレード商品の販売をしており、これは北海学園でも実施することができるのではないかと考えました。３つの班でそれぞれ取材に行き、大学で実施可能なSDGsの取り組みを考え、大学へ提案する案を考えました。

地域研修報告会に向けて検討会

も学ぶことができた。日新堂ではフェアトレードのバナナペーパーをきっかけに、全国のエシカルな事業に取り組む企業とネットワークを形成している。新旧・大小にかかわらず、エシカル消費やCSRの拡大を通じて、企業の行動そのものが変化しつつあることを感じることができた。

③大学・市民班　利益追求を主たる目的としない団体（ろうきん・みんたる）と市内の大学（北星大・北大）とに調査を行った。ろうきんでは共生社会の実現のために組合員の福祉向上や社会貢献活動をSDGsゴールと照らして取り組んでいた。みんたるでは、フェアトレード商品を広く手に取ってもらうため、地域イベント出店や高校・大学の学祭への商品提供を行っていた。企業班との比較という意味でも興味深い考察となった。本学と同規模の北星大では参考になる取り組みが多かった一方で、国立大学である北大では専門部署を設けており、規模の大きさ、取り組みの充実さを知ることができた。この調査の中で、学生ボランティアの拡大や大学WEBサイト立ち上げなど、大学に対する具体的な提案が議論された。

いずれの班でも、調査を進める中で、共通点や相違点に気づかされ、議論を重ねることで、調査内容の意義づけや課題について自分たちの考察を導き出せた。しかし、目的の一つであった「大学への提案」については、調査に時間を取られ、十分な議論ができなかった。実現できなかったが、全学的なシンポジウム開催も検討された。道内外の大学・企業の取り組み調査を含め、次の研修課題として今後にも期待したい。

写真④⑤【大学･市民班】ろうきんインタビュー。⑥【大学・市民班】みんたるインタビュー。⑦⑧【大学・市民班】北星学園大学インタビュー。

④

⑤

⑥

⑦

⑧

学生研修記

藤井 春妃
地域経済学科３年
仙台第一高校出身

地域研修を終えて

今年度の平野ゼミでは、「北海道の企業・大学・行政におけるSDGsの取り組みについて」を研究のテーマとし、企業班、大学班、行政班の３つの班に分かれて活動しました。

私は企業班として北海道新聞社とSTV札幌テレビに伺いました。地域に根ざした企業として、SDGsという言葉が浸透する前から、環境保護活動や地域貢献活動をしているということがわかりました。またメディア企業としてわかりやすく印象的に伝えるための工夫も教えていただきました。

他の２つの班の報告から、北海道全体としてSDGsへの意識が低く、SDGsという言葉が独り歩きしてしまっている現状があると感じました。初めから主体的に取り組むことが難しいかもしれませんが、多くの人が関心を向けることで大きな動きがあるのではないかと思いました。

政氏 拓磨
地域経済学科３年
札幌光星高校出身

大学はどのようにSDGｓと関わるべきか

私たちのゼミでは、大学班、企業班、行政班に分かれて札幌市内で地域研修を行いました。

私は大学班として、最終的に「大学側に取り組んでほしいSDGｓ」の提案を目的として同じ私立大学である「北星学園大学」や高校や大学のイベントに多く参加されている「みんたる」を訪問しました。

研修の結果、「北星学園大学」はキリスト教精神に基づく教育理念のもと平和や戦争に関する授業や取り組みに力を入れていることが分かりました。「みんたる」ではイベント出店や学校、生協にフェアトレードコーナーを設置することで、フェアトレード商品への偏見をなくし、身近にする取り組みをしていると分かりました。

これらのことから、大学はSDGｓのために行動するのではなく、例えば、生協にフェアトレードコーナーを設置するといった普段から行われる学校の取り組みにプラスして行うことのできるSDGｓを行うことで長くSDGｓを続けることができるのではないかと感じました。

1部
藤田知也ゼミⅠ

参加学生数13名

藤田 知也
地域経済学科
准教授

地域研修の打ち上げ会場にて

ダークツーリズムの光と影～歴史の記憶と観光の課題～

研修地：兵庫県淡路市・洲本市・神戸市・大阪府大阪市

◉研修目的

新たな観光の在り方として、「ダークツーリズム」がある。淡路島と神戸市、大阪市でダークツーリズムの構成要素となる観光資源を訪れることでダークツーリズムの在り方を学ぶ。そして、ダークツーリズムのメリットは何なのか、ダークツーリズムが抱えている課題は何かを検討する。

研修先・日程

9月18日　野島断層保存館、生石山堡塁跡、人と未来防災センター、戦没した船と海員の資料館、大阪城、ピースおおさか、模擬原子爆弾投下跡地（恩楽寺）

写真①野島断層保存館。②阪神淡路大震災の被害状況を知る。③野島断層の見学。④大阪大空襲の慰霊碑。⑤恩楽寺。⑥人と未来防災センターの展示。⑦野島断層保存館にて中瀬さんによる解説。⑧大阪城

①

②

③

④

⑤

⑥

⑦

◉総　括

1部藤田ゼミⅠでは、負の遺産観光を意味する「ダークツーリズム」をテーマに地域研修を実施した。訪問先は兵庫県の淡路島と神戸市、大阪府大阪市で、特に神戸や大阪は都市観光のできるエリアでありながらも、戦争遺構や災害遺構が残っている。淡路島も近年はコンテンツとタイアップした観光に力を入れているエリアではあるが、同様の遺構がみられる地域である。

野島断層保存館では、阪神淡路大震災によって生じた断層のずれが保存されており、地震による被害の様子も併せて様々な展示がなされている。大阪市には太平洋戦争中に模擬原爆が投下された場所の近くに石碑が置かれ、過去を今に伝えている。

淡路島・神戸・大阪は観光地として成立している地域だが、ダークツーリズムという視点では知られていないようなところが存在する。過去を今に、そして未来へ伝える場所の存在は重要であるが、それをどう広めていくべきか、そもそも広めるべきなのか、ダークツーリズムを成立させるには考えるべきことが多くあることが理解できた研修になったと思う。

最後になりましたが、野島断層保存館の中瀬様、NPO法人大阪観光ボランティアガイド協会の切山様には大変お世話になりました。ありがとうございました。

学生研修記

遠藤 優知
地域経済学科２年
中標津高校出身

地域研修を終えて

私たちのゼミナールでは悲惨な過去をもつ地域を観光地化することや集客して見世物にしてもよいのか、という視点から現地に行き理解を深め課題を見つけることを目的として地域研修に臨みました。私たちは淡路島に訪れ淡路島自体の南北の格差が激しい現状を感じました。南部に位置する生石山堡塁跡ではアクセスが悪く整備がされていないため観光には向いていないと実感しました。一方で北部に位置する野島断層保存館はアクセスが容易でインストラクターの説明が理解しやすく、体験型によって当時の悲惨な過去を学ぶことができる良さもありました。しかし、事前知識がないと理解しがたい点や観光客が少ない点が課題と感じました。したがって、南北の交通を均等に整備することが重要であると考えます。そして、後世に悲惨な過去を継承するためには事前知識をどのように広く伝えていくかを考えていくことが私たちに必要と痛感しました。

坂本 実来
地域経済学科２年
市立函館高校出身

大阪市におけるダークツーリズムの利点と課題

私たち藤田ゼミは、ダークツーリズムの現状を知るために関西エリアを研修場所として調査しました。今回の研修は、悲惨な背景がある場所をダークツーリズムとして観光地化することは正しいのかという観点からダークツーリズムの実態を把握することを目的としました。私たちが訪れたのは、主に3か所です。大阪市、神戸市、淡路市の3グループに分かれて調査しました。私を含む大阪市グループは、大阪城・ピース大阪・JR京橋駅爆撃慰霊碑と平和像・模擬原子爆弾投資跡地の四か所へ行ってきました。どの場所も、戦争の残酷さが伝わり大変勉強になりました。また、大阪城を案内してくれたガイドの切山さんは「若い人への伝承」を大切に活動されていました。私たちも学ぶ姿勢をもっと身につけなければならないと実感しました。今回の研修を通して、正しい知識をもち話し手の想いを受け取ることの重要さを理解しました。どのグループも主体的に活動できた、充実した地域研修になりました。

1部
藤田知也ゼミⅡ

参加学生数14名

藤田 知也
地域経済学科
准教授

キハ183系の前で

室蘭線黄色線区、「存続」か「廃止」か

研修地：栗山町、安平町

◉研修目的

本研修では、JR北海道が単独維持困難線区に設定している輸送密度200人～2000人未満線区（黄色線区）の1つである室蘭線（岩見沢～苫小牧間）に焦点を当て、将来を見据えた沿線の地域資源の利活用について把握する。その上で、この線区は存続させるべきか、廃止させるべきかを検討する。

研修先・日程

9月14日　小林家・小林酒造、室蘭線乗車、D51ステーション、早来学園・はやきた子ども園

写真①小林家見学。②小林家見学終了後のひととき。③小林酒造で説明を聞く。④小林酒造の見学。⑤室蘭線に乗車⑥追分駅にて⑦D51ステーションのキハ183系車内にて。⑧はやきた子ども園にて。

①

②

③

④

◉総　括

1部藤田ゼミⅡでは、学生が外部の視点から室蘭線（岩見沢～苫小牧間）は今後どうするべきかを考えることを目的に地域研修を行った。地域研修の前に、関係者の方々に講演をしていただき、炭鉄港との関係性や自治体から見る室蘭線の在り方について学んだ後、地域研修を行い、研修前後での存廃の意識の変化を基に室蘭線の今後について検討した。存廃の考えについては、存続で変わらない・存続から廃止・廃止から存続の3パターンがあったことから、それぞれで異なる考えを持ったことになる。沿線の地域資源や安平町の教育への取り組みなど、地域の様々な特長に触れることができたが、それ故に感情的には存続でも費用面を考慮するとどうなのか等、存廃問題の難しさをより深く理解し、学べたのではないかと思う。

最後になりましたが、今回の地域研修では大変多くの関係者の皆様にお世話になりました。石炭博物館館長の石川様、岩見沢市役所の相澤様・嘉屋様、栗山町の望月様、小林家の小林千恵子様、小林酒造の本田様、安平町役場の高橋様、安平町地域おこし協力隊の谷口様、はやきた子ども園園長の福田様、北海道チャイナワークの矢野様には大変お世話になりました。ありがとうございました。

学生研修記

奈良 慶子
地域経済学科3年
市立函館高校出身

JR北海道が抱える赤字路線について

私たちはJR室蘭線の黄色線区（岩見沢駅～沼ノ端駅）存廃をテーマに研修を行いました。赤色線区、黄色線区という単語を聞いたことはあるでしょうか。赤色線区は廃止が決定した線区、黄色線区は将来廃線になる可能性が高い線区のことです。本研修では、実際に栗山町と安平町で観光名所を訪れたり、実際にJR線に乗車したりして現在の利用状況を調べました。研修後の資料作成では、研修前後で存続→廃止派、廃止→存続派、存続→存続派に分かれて意見をまとめました。存続派では通学に使用されること、観光時の交通手段であること、反対派ではバスへ代替可能なこと、地域住民は車の利用率が圧倒的であることが主な理由として挙げられました。今回の研修は赤字路線について深く考える機会となりました。JRは民間企業であるため利益が上がらなければ路線は廃止になっていきます。赤色・黄色線区となっている区間がいくつもある中で、特に人口が少ない地域でのJRの動向を注視していく必要があると感じます。

渡邊 哲哉
地域経済学科3年
北見北斗高校出身

室蘭線ってなんやねん

室蘭線ってなんやねん。初めてその名称を耳にしたときに思ったことである。地域の方にゼミナール内で公演をしていただき、室蘭線についての知識が豊かになるにつれて、室蘭線は大変なことになっていると嫌でも思い知らされた。減り続ける利用者とは裏腹に膨らみ続ける赤字、存続させられるかどうかの瀬戸際であり、私たちには室蘭線の今後について第三者のフラットな視点から考える責任が生じた。私たちが研修で感じたこととして、該当地域で生活されている方々は地域を愛し、逃げも隠れもせず真剣に向き合われていた印象を強く受けた。また、子どもの未来を自分のことのように案じ、現状できることに全力で取り組まれていると強く認識できた。室蘭線沿線には地域の未来を真剣に考えている素敵な方々がたくさんいらっしゃった。これからの沿線地域の未来も非常に明るいものになると確信し、またそう心から願っており、室蘭線に対する認識が変わった研修となった。それはそうと、大幅な赤字に見合った利益がないので、室蘭線は廃止したほうが良いという結論を下した。なんでやねん。

⑤

⑥

⑦

⑧

2部
藤田知也ゼミⅠ・Ⅱ

参加学生数10名

藤田 知也
地域経済学科
准教授

総合公園にて

分散型旅行を見据えた新たな観光ルートの発掘
研修地：長沼町

◉研修目的

コロナ禍が明け、オーバーツーリズムと呼ばれる観光客が集中することによる問題が全国各地で見られている。この問題を解決する概念としてコロナ禍の際に提唱された「分散型旅行」が挙げられる。本研修では分散型旅行の概念に着目した上で道央圏の新たな観光ルートの発掘を試みる。

研修先・日程

9月25日　長沼町総合公園、道の駅マオイの丘公園、あいチュらんど

写真①総合公園にて。②パークゴルフ場へ向かう。③パークゴルフ。④道の駅のマーケット。⑤展望台にいるゼミ生たち。⑥絶景を見てたそがれる。⑦あいチュらんどにて。⑧ランチタイム。

①

②

③

④

⑤

⑥

⑦

⑧

◉総　括

札幌市ではインバウンドをはじめとする観光客が数多く見られ、北広島市ではエスコンフィールドが開業し多くの来場者が訪れている。こうした道央圏の事例のみならず、全国的に観光客の集中による様々な弊害が顕在化する中、観光客を分散させる取り組みを考えることは混雑の緩和・平準化を目指すことに繋がる。加えて、分散先地域における観光を通じた地域活性化にとっても重要な視座となる。2部藤田ゼミの地域研修では札幌や北広島に比較的近い長沼町を訪れた。同町に観光のポテンシャルはどれほどあるのか、そして、分散型観光を推進するうえで、どのような取り組みが必要かを検討すべく、現地で研修を行ったが、長沼町の場合、主たる観光スポットが市街地から離れている郊外部に存在することが多いため、公共交通機関で町内を観光することは現状極めて難しいことが分かった。また、宿泊施設も少ないことから、宿泊客の受け入れ態勢が不十分ではないかという意見も見られた。分散型旅行の概念と地域の実情を組み合わせて、観光による地域活性化について検討することができたのは、学生にとっても良い機会だったのではないかと思う。

学生研修記

土門 咲蘭
地域経済学科２年
室蘭清水丘高校出身

長沼町の観光振興と交通課題

近年、札幌市を訪れる観光客が急増しており、特に夜になると市中心部が観光客で溢れています。この状況を受け、私たちはオーバーツーリズムの対策として、分散型観光に注目し、長沼町で研修を行いました。

実際に長沼町を訪れてみると、動物たちと触れ合ったり、キャンプを楽しんだりできる自然豊かな環境が魅力的でした。しかし、公共交通機関などの交通インフラが不十分であり、これが観光客の訪問を妨げる要因となっていると感じました。

さらに、公共交通機関の整備だけでなく、長沼町の市街地周辺に宿泊施設や飲食店を増やすことも重要であると考えます。例えば、北広島市にあるエスコンフィールドHOKKAIDOからの観光客を意識し、長沼町への訪問者数を増加させることが期待できます。これにより、観光促進につながり、地域経済の活性化にも貢献するのではないかと考えています。

矢田 知助
地域経済学科３年
札幌新川高校出身

札幌周辺地域の観光の可能性

昨今北海道では、人やモノ、産業といったものが札幌に集中しており、観光においても、特に大通、狸小路といった札幌の中心部に魅力や観光客が集中しているのではないかと考えました。そこで私たちは今日そして今後、札幌がオーバーツーリズムになる可能性があると考え、分散型観光、札幌市周辺の新たな観光ルートの発掘を視野に、長沼町を訪れました。実際に行ってみると、現状でも観光ルートとしての魅力となるようなレジャーや施設がある一方で、交通の便の悪さや、引きとなる観光スポットの少なさなど、課題もあることを実感しました。この結果を踏まえ、今後長沼町が観光ルートとしてさらに魅力的となり、多くの人に来てもらうにはどうすれば良いかを、様々な視点から検討し、議論を進めました。

当日は、パークゴルフを楽しみ、昼食は長沼町ならではの飲食店を各自で周り、スイーツ店でアイスクリームを堪能するなど、充実した１日を過ごすことができました。

1部
古林英一ゼミⅡ

参加学生数12名

古林 英一
地域経済学科
教授

ばんえい牧場十勝にて

地域経済におけるばんえい競馬の役割と課題

研修地：帯広市、本別町

◉研修目的

帯広市が主催するばんえい競馬は世界でもここでしか行われていないといわれる特異な競馬である。

一時は存廃の危機にあったばんえい競馬は今では帯広市の重要な観光資源にもなっている。

ばんえい競馬の地域における役割を考察することが研修の目的である。

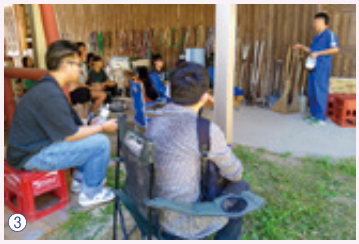
研修先・日程

9月8日　馬の資料館
　　帯広競馬場
9月9日　（株）アズキとコムギ牧場（本別町）
　　ばんえい牧場十勝（帯広市）

写真①帯広競馬場内ふれあい動物園。②帯広市ばんえい振興室のレクチャー。③アズキとコムギ牧場でのレクチャー。④繁殖雌馬（アズキとコムギ牧場）。⑤スターティングゲート（ばんえい十勝牧場）。⑥第2障害の途中(ばんえい十勝牧場)。⑦第2障害頂上(ばんえい十勝牧場)。⑧調教用の鉄ソリ（ばんえい十勝牧場）

①

②



③

◉総　括

まず、帯広競馬場に併設されている馬の資料館で北海道における馬の歴史的役割を学び、帯広競馬場内で競馬を担当する帯広市農政部ばんえい振興室の職員から、帯広市にとってのばんえい競馬の歴史や存在意義について説明を受けた。その後、駐車場の調査やふれあい動物園・とかち村などの見学を通し、競馬と競馬場の多面的な観光資源として利用を確認することができた。また、ばんえい競馬では、一般的な競馬で供用されるサラブレッドではなく、日本輓系種という大型の馬（重種馬）が供用される。本別町の重種馬生産牧場である(株)アズキとコムギ牧場を経営する梅村智秀氏による重種馬生産についてのレクチャーと質疑応答を通じ、重種馬生産の現状と課題を学び、さらに企業的に重種馬の生産と育成をおこなっているばんえい牧場十勝では、生産と育成について学ぶと同時に、帯広競馬場と同等の走路を実際に歩くことで、馬の力の大きさを実感することもできた。

学生研修記

帯広市が育む馬と人の関係を眺めて

嶋木 裕貴人
地域経済学科３年
札幌第一高校出身

古林ゼミⅡでは豊かな自然が広がる帯広市を訪れ、北海道が誇る馬産業の実態を調査しました。特に帯広市は、日本で唯一ばんえい競馬が開催される都市であり、他の馬の特産地域には無い特徴が見られる点も、今回の研修を有意義なものにしてくれました。

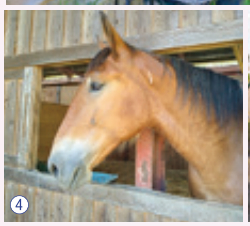
研修は１泊２日の日程で両日ともに良く晴れ、外で活動するにはもってこいの日和であり。まず初めに訪れたのは、帯広競馬場で個人的にはこの日が初めて競馬場というものに足を踏み入れましたが、当日は実際に競馬が開催される曜日であったためか、施設内はとても賑わっていて、競馬に対する人々からの人気が感じられました。特に意外に感じられたのは、女性や家族連れの層が思いの外多かった所であり、それまでは競馬とは言え賭け事ではあるというイメージを持っていたことから、大衆向けではないと思っていたので、実際に目にしたことで、競馬というものへの印象が大きく変わるという貴重な体験をすることができました。また、馬を飼育する牧場へも訪れ、広大な土地でのびのびと過ごす馬と戯れながら、当事者の方々から馬産業に携わる魅力や馬産業が抱える課題についてお話しを聴かせて頂きました。この時やばんえい競馬の際にも感じられましたが、帯広市では馬と人との距離感が物理的にも精神的にもとても近いという印象を強く受けました。もしかすると、帯広市で馬産業が発展したのは、豊かな土地の他に現地の優しい人々の馬に対する愛着があったことも要因となっているかもしれないと感じずにはいられませんでした。私は生まれも育ちも北海道でありながら、今まで馬と関わることがほとんどなかったのですが、今回の研修を通して自分の知らなかった馬の世界に触れて、今後の馬産業の展望に期待するとともに、今後馬産業がどのような展望を迎えるのか、また自分に何かできることはあるのかと考えさせられるきっかけになったと思います。

ばんえい競馬と地域活性化

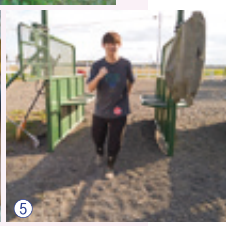
野上 寛太
地域経済学科３年
旭川北高校出身

私たちのゼミでは、帯広市のばんえい競馬を訪れました。実際にレースに賭ける体験を通じて、観客としての視点で競馬の魅力を感じました。また、市役所の方からばんえい競馬の運営や市に与える経済効果についてお話を伺い、その地域への貢献度を具体的に知ることができました。さらに、帯広市周辺の様々な牧場を周り、馬についての知識を深めたり、馬の資料館では、競技に使用される馬や歴史に関する展示を見学し、帯広市がばんえい競馬を地域資源として大切にしていることを実感しました。

この研修を通じて、地域産業が経済や観光に与える影響を深く学び、地域活性化におけるスポーツの可能性を再認識しました。



④



⑤

⑥

⑦

⑧

1部
水野邦彦ゼミⅠ・Ⅱ

参加学生数16名

水野 邦彦
地域経済学科
教授

月形樺戸博物館にて

北海道開拓時の囚人労働の実態を学ぶ

研修地：月形町・当別町

◉研修目的

今年度の地域研修では、北海道開拓時に導入された囚人労働に目を向け、その拠点となった月形町の樺戸集治監（現・樺戸博物館）で種々の資料を見学し、学芸員の説明を受けた。あわせて隣の当別町に劉連仁生還記念碑を訪ねた。

研修先・日程

9月17日　月形町・樺戸博物館
　　月形町・篠津山霊園
　　当別町・劉連仁生還記念碑

写真①旧樺戸集治監入口（囚人の出入口ではない）②雑居房③独房。④目立つ朱色の囚人服（「赤い人」と呼ばれた）。⑤囚人の弁当箱。⑥労役を終えて戻る囚人たち。⑦囚人墓地（篠津山霊園）。⑧劉連仁生還記念碑を囲んで。

①

②

③

◉総　括

1881年開庁の樺戸集治監（のちの樺戸監獄）は北海道初の囚人収容施設で、本州から移送されてきた囚人たちが道路や農地開墾など開拓の基礎整備に従事した。囚人は屯田兵屋400戸のうち300戸を建設し、河床・橋梁・鉱山などの土木工事に駆り出されてゆく。その拠点がいまの月形であり、開拓景気の月形は、札幌か月形かというほどの賑わいをみせたといわれる。樺戸集治監は延べ46,722人を収容し、囚人の食糧の自給自足をはかり、味噌醤油をも醸造した。囚人は赤い服を着せられ、名前でなく番号で呼ばれ、夏は10時間半、冬は7時間の労働が課せられた。入浴は、6月～9月は5日に一度、10月～5月は10日に一度と定められていたが、水不足でじっさいには20日に一度であったという。のちに集治監は空知・釧路・網走にもつくられ、やは囚人たちの苛酷な労働によって上川道路・網走道路などが開鑿されたが、これらの道路が道内の入植道路ないし産業道路として、その後の北海道開拓の礎をなすにいたる。こうした苛酷な労働と、のちの朝鮮人、および劉連仁をふくむ中国人の強制労働とのうえに、今日の北海道が築かれたことを、私たちは心得ておくべきだろう。

学生研修記

安住 明日香
地域経済学科２年
刀根山高校出身

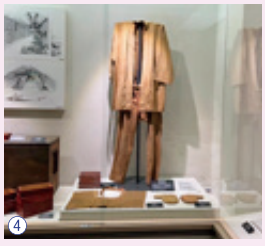
想像を絶する非人間的な労働

大型機械を用いた今日の道路建設でさえ膨大な労力と時間が必要なのに、当時の樺戸集治監の囚人は手作業で道路建設を強いられ、しかも不十分な装備で厳しい自然の中に投入されてクマ・オオカミ・ブヨなどの動物に怯えながら、また冬は過酷な寒さに耐えながらの作業であったと聞き、その困難は想像を超えるものでした。他方で、道路建設に適さない土地では排水路を作り、飲料水の確保が難しくなると木管を用いて水道を設置したり、工事をすすめる方向がわかるように道路の終着点に煙を上げて目印にしたりする工夫もみられたようです。しかし、寒さや飢えで亡くなった囚人の遺体が放置されて風にさらされていたことは衝撃でした。のちに囚人の亡骸は篠津山墓地に土葬されますが、引き取り手のない亡骸は掘り起こされて焼かれ、合葬されたそうです。この墓地を整備した1981年、周囲の草を刈ったところ、土饅頭がいくつも現われたという話には胸が痛みました。

鹿野 裕哉
地域経済学科３年
大麻高校出身

過酷な労働と、山中に隠れつづけた13年

田畑が広がる当別町の一角、細い道の横に劉連仁生還記念碑はある。中国の貧農家庭に育った劉連仁は、日本軍に協力する中国人傀儡兵に数珠つなぎにして連れ出され、貨物船の船底に押しこまれて九州の港へ、そして留萌の炭鉱に送られた。虐待が当たり前の炭鉱では、日々過酷なノルマが課せられ、休憩は10分のみ、昼食は饅頭１個、休日も賃金もなかった。栄養不足で体重は90kgから60kgにまで減り、現場では事故死・衰弱死・餓死・病死が日常茶飯事だったという。ある日、炭鉱の奥で休んでいたところを見つかり、仲間５人とともに逃亡した。山中に逃げこみ、昼は出歩かず、夜になると近くの畑から食料を取り、または海岸の昆布で飢えをしのいでいた。毎日のように居場所を変え、一晩として安眠できず、冬は豪雪と極寒をクマの冬眠のようにして過ごしたという。1958年、狩猟中の日本人に発見され、派出所に連れてゆかれたときに、戦争が13年前に終わり日本が敗戦国になったことを知らされる。奇跡の生還を迎える肉親はすでにいなかったという。



④

⑤

⑥

⑦

⑧

1部
水野谷武志ゼミI·II

参加学生数21名

水野谷 武志
地域経済学科
教授

帯広市役所前で

人口減少社会の現状と解決に向けた展望

研修地：帯広市

◉研修目的

人口減少に適応しつつ持続可能な地域を今後どのように構築していくかは日本社会にとって重大な課題である。これを具体的な地域を通して考えてみることが本研修の目的である。対象地域としては，北海道の中でも人口減少のスピードが比較的緩やかな十勝地域，その中でも帯広市に注目した。

研修先・日程

8月26日　帯広市役所、十勝総合振興局
8月27日　帯広百年記念館、川原邸（帯広市の文化遺産）、とかち農機具歴史館、JA帯広かわにし本店
8月27日　とかち地域活性化支援機構（十勝産業振興センター内）

写真①由仁サービスエリアで休憩中。②帯広市職員との意見交換会。③十勝総合振興局職員との意見交換会。④帯広百年記念館を見学。⑤川原邸を見学。⑥とかち農機具歴史館を見学。⑦JA帯広かわにし本店での意見交換会。⑧とかち地域活性化支援機構職員との意見交換会

◉総　括

帯広市役所では，現行の「人口ビジョン」とそれに基づく「総合戦略」が見直され，新しい改定版では人口減少をある程度前提にした上で活力あるまちづくりが模索されていた。十勝総合振興局では，十勝という広域で観光振興や移住政策を展開することによって，帯広市を含めた各自治体のまちづくり政策を補強していた。JA帯広かわにし本店では，ロボット技術や情報通信技術等を活用したスマート農業を進めて人手不足を補うとともに，結婚支援や地域イベント開催によって地域に住み続けられる環境づくりに力を入れていた。とかち地域活性化支援機構では，地元企業との協力関係を活かした新しい商品の開発や販路開拓，中小企業の魅力発信事業などを通じて，十勝の産業を盛り上げていた。

地域の様々な主体の優れた取り組みが「解決」とまでは行かなくとも，人口減少のスピード緩和につながりうることを理解することができた。このような取り組みが地域でさらに発展するためには，様々な主体間のさらなる連携・協力関係の構築が今後重要になるのではないかと感じた。

学生研修記

松井 寧々
地域経済学科２年
札幌旭丘高校出身

十勝地方及び帯広市の人口減少対策

私たちは人口減少の現状を把握し、今後の対策について考えるために帯広市に訪れました。帯広市役所、十勝総合振興局、とかち機構、JA帯広かわにしの皆さんに取材をさせていただきました。帯広市の合計特殊出生率は2022年には1.2となり、出生数の減少は拡大傾向にあります。市の人口減少対策としては、結婚・出産を支える環境づくり、生活環境の質の向上を図ることで安心安全で住みやすいまちをつくる、豊かな自然や食といった魅力を活かし、インバウンド誘客を促進させる、創業・起業支援などが挙げられます。農業面では、スマート農業の促進を重視しており、実際にスマート農業の地域構想として、高解像度画像によるAI化、複数台の無人同時制御という二本柱があります。これを進めることで効率的な農業を行うことが可能になると考えられます。この地域研修を通して、私は人口減少の抑制だけでなく、人口減少社会に適応することも重要視すべきであると考えました。直接伺うことで本やインターネットで調べること以上の知識と、人口減少についての理解を深めることができました。

早坂 隆摩
地域経済学科３年
別海高校出身

人口減少問題への考え方

私たちは人口減少の現状を知ることで少子高齢化社会の中で地域がどう対処していくべきかを考えるため人口減少問題について行動している帯広市、十勝に訪れました。

帯広市では市役所を始め、十勝総合振興局、とかち機構、JA帯広かわにしがそれぞれの役割の中で人口減少問題に取り組んでいました。地域住民同士の交流の場を設けたり生活環境の向上を図ることで、結婚や出産を考えることの出来るまちに向かっているように感じました。帯広市の魅力の１つである農業は機械化、効率化がかなり進んでいました。農業を地域の魅力として発信することで後継者問題や放棄農地の問題にも対処出来る可能性を見いだせるのではないかと考えました。今回の調査で市と近隣地域の差や外部参入の影響について学び、人口減少を「食い止める」のではなく「緩やかにする」という新たな視点を得ることが出来ました。規模を段階的に縮小させながら地域と住民が接していくことで小規模で持続可能な社会へと発展していくのではないかと考えました。この人口減少問題というのを単なる困難として扱うのではなく、地域の持続可能性という点を見直し新たな可能性を発見する契機と捉えることが重要なことなのではないかと考え、人口減少問題への理解が深まった調査でした。

2部
水野谷武志ゼミⅡ

参加学生数2名

水野谷 武志
地域経済学科
教授

釧路マーシュ＆リバーの看板前で

釧路町の観光振興を考える

研修地：釧路町

◉研修目的

コロナ後に観光需要が回復する一方で，多くの地域でオーバーツーリズム問題が表面化している。本研修の目的は，そのような状況において地域の観光振興はどうあるべきかを具体的に考えることである。

研修先・日程

9月17日　そば処ながや（昼食）、達古武オートキャンプ場、夢ヶ丘展望台、細岡ビジターズ・ラウンジ、細岡展望台、釧之介（夕食）
9月18日　キトウシ（来止臥）野営場、セキネップ展望広場、尻羽岬、釧路町地産地消センターロ・バザール（昼食）、別保公園散策、釧路マーシュ&リバーによるカヌー体験、南蛮酎（夕食）
9月19日　釧路町役場で商工観光課職員と意見交換

写真①夕日と細岡展望台。②キトウシ（来止臥）野営場からの絶景。③難読地名看板in セキネップ展望広場。④尻羽岬へ向かう。⑤釧路湿原をカヌーで体感。⑥カヌー体験終点の岩保木水門前で。⑦ザンダレin南蛮酎。⑧釧路町役場での意見交換会。

①

②

③

◉総　括

研修目的を達成するために，道内において比較的にまだ観光地化されていない釧路町に注目し，釧路町の主要観光スポットを体験した上で，釧路町役場の商工観光課職員と意見交換した。釧路湿原国立公園内の釧路川をカヌーで下り，夏期は霧の発生が多いにもかかわらず当日は天候に恵まれて，厚岸霧多布昆布森国定公園の要所にある展望台からは太平洋を一望することが出来た。素晴らしい観光体験をもとに，釧路町の観光振興における課題と可能性について釧路町職員と意見交換した結果，現状ではオーバーツーリズム問題はないが夏に比べて冬の観光客が少ないという課題があることを知った。一方で，釧路町の観光資源（カヌー体験，キャンプ場，グルメ，釧路湿原と太平洋の絶景，難読地名など）はあまり知られていないだけで，非常に魅力的であることもわかり，釧路町のさらなる観光振興にとって，魅力の発信向上が重要になると感じた。

学生研修記

石岡 大知
地域経済学科３年
札幌藻岩高校出身

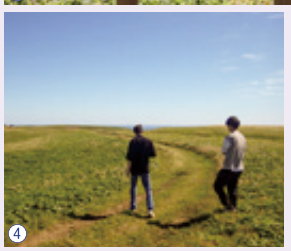
わたしのビフォーアフター―釧路町観光について

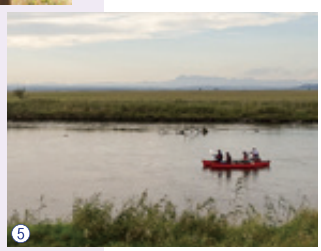
私たちの研究テーマは「釧路町観光の魅力と隠れたポテンシャル」です。私たちはコロナ禍が落ち着いて北海道の観光が再び注目を浴びている今、釧路湿原が一番人気とされる釧路町にあくまで観光客として観光してきました。そこで経験した釧路町の魅力は言葉に表せないほど魅力が詰まっていました。特に自然を活かした観光スポットは現地で見なければ味わえない感動がありました。もちろん、釧路湿原が一番有名であり人気スポットであることは間違いないです。夕方ごろに釧路湿原がよく見える細岡展望台へ行くと、そこから見える広大な湿原と後ろに夕日が重なると絶景でした。しかし、釧路町の魅力はそこだけでなく、おいしいごはん処であったり太平洋が見える海沿いは晴れると視界の180°すべてが大海原という釧路町でしか見られない景色がそこにはありました。釧路町観光を実際行ってみてわかったことは釧路町には魅力がたくさんあること。そして自然を通して、札幌での日常生活から乖離した非日常生活を体験することができることです。

松本 悠生
地域経済学科３年
札幌東陵高校出身

実際に行ったからわかる魅力の深さ

釧路湿原を活かしたアクティビティや、釧路町ならではのグルメ、ここでしか見られない風景などを事前に調べ、夏休み期間に現地に訪れて実際に体験して、その体験をもとに情報の整理や、新たな可能性を考察しました。私は、この研修に携わる前は釧路町と釧路市が違うものだということすら知らなかった状態でしたが、実際に訪れてみると、知られていないだけで、他の観光地に負けない釧路町ならではの魅力がまだまだ眠っていることを身をもって知ることができました。2泊3日ではその魅力を体験しきれなかったので、個人的にまた訪れたいと思っているほどです。私たちのゼミではArcGISという地理情報システムを扱っており、そのシステムの機能を使用し自分たちに必要な地図データを一から作り出すことができるので、その資料を活用した発表を行いました。この話だけを聞くと難しそうに感じるかもしれませんが、１年かけて基礎を楽しみながらのんびり学んだ後に実践するので、難しいと感じることはほとんどなく、貴重な体験ができるので、このゼミを選んでよかったなと思っています。


④


⑤

⑥

⑦

⑧

1部
宮入隆ゼミⅠ・Ⅱ

参加学生数22名

宮入 隆
地域経済学科
教授

田中農場の放牧地にて

物価高騰下における北海道酪農の課題と対策

研修地：足寄町

◉研修目的

ポストコロナの資材価格の高騰は輸入飼料に依存する北海道酪農を直撃し、乳価が高い水準を維持しているにもかかわらず、酪農経営に厳しい影響を与えている。このような状況の打開策を探るため、放牧酪農が盛んな足寄町を事例に、今後の酪農経営・産地のあり方を検討した。

研修先・日程

8月21日　JAあしょろバイオマスセンター
8月22日　JAあしょろ本所
　　農業機械倉庫
　　田中農場（芽登地区）
8月23日（株）北海道ちぬやファーム

◉総　括

最初に今回の調査で明らかになった資材価格の高騰の影響をまとめてみたい。高泌乳を目指す一般酪農経営、放牧酪農の双方で、飼料等の資材価格の高騰が影響を与え、所得率の低下をまねいていた。営農支援の要となるJAコントラクター事業では、燃料費や資材の高騰に加え、オペレーター職員の確保に苦慮し、結果として、組合員の利用単価を上昇させることで対応していた。しかし、それによる組合員の利用率が下がるという悪循環を垣間見ることとなった。

とくに影響が深刻だったのは、飼養頭数の拡大と効率化を目指した一般酪農経営であった。それは高泌乳化のために大量の配合飼料を常時給餌しているためであった。他方、調査研修を行った田中農場を事例に放牧酪農経営の実態をみると、確かに資材価格高騰の影響は一部あるものの、環境変化に合わせて、即座に飼養頭数と混合飼料の給餌量を減らして費用を下げた結果、一定の農家所得を確保することができていた。

ゼミ生たちは生乳生産量に占める一般酪農の大きさとその重要性を認識しつつ、多様な経営が地域に存在することでリスク回避になっていること、データの蓄積が給餌量や飼養頭数管理の改善を図ること、自治体支援の重要性等を指摘した。

写真①JAあしょろの大型農業機械前で。②放牧牛に近づくゼミ生。③夕食後のカラオケタイム。④北海道ちぬやファームの馬鈴薯倉庫にて。⑤JAあしょろバイオマスセンターで。⑥バイオマスセンター内部の見学。⑦農協での座学風景。

①

②

③

学生研修記

足寄町から考えた北海道酪農のこれから

加藤 詩花
地域経済学科２年
北見北斗高校出身

足寄町は十勝の東北部に位置する広大な面積をもつ自然豊かな町です。農業生産にとっては、平坦ではない条件不利地が多く、畑作ではなく、酪農を基幹とした経営を主とする農業地域です。中山間にある芽登地区では草地資源を活かした放牧酪農が盛んです。新規参入で放牧酪農を行う田中農場の経営主からは、就農経緯や３～４月にのみ分娩を行う「季節分娩」などの飼養方法を伺いました。また、配合飼料を朝晩で１kg／頭と最低限で抑え、さらに頭数を減らすことで、資材高騰の影響を回避していることも教えて頂きました。このように放牧酪農はそれぞれの経営も多様で、厳しい状況を様々な工夫で乗り越えようとしているのだと実感しました。生産資材価格の高騰は、確かに北海道農業全体に厳しい影響をもたらしています。だからこそ、足寄町のような地域の条件を活かした多様な経営方式や自治体や農協による連携支援など、支える仕組み作りが大切だと思いました。

酪農の課題と幅広い連携の必要性

福原 颯人
地域経済学科２年
北海高校出身

私たちは酪農が盛んな足寄町を事例に、物価高騰下における課題と対策を調査から検討しました。研修を通じて自治体、JA、農家の幅広い連携をさらに強化する必要性を強く感じました。足寄町では放牧酪農が盛んで多様な経営形態が維持されています。一方で、近年の物価高騰によるコスト増のために所得率が低下しました。そのため、離農者の増加や生乳生産量の縮小が危惧されています。これらの課題に対処するためには、個別経営の努力だけでは何ともならず、自治体とJAが連携して農家を支える施策の強化が求められます。足寄町では補助金制度やコントラクター事業を活用し、酪農経営を支援していました。これらは北海道全体にも共通する重要な取り組みですが、それら施策をさらに充実させるためには、自治体、JA、農家が連携し、相互の役割分担と協働を深めることが重要だと実感しました。今回の研修で学んだ知識を今後のゼミ活動に活かしていきたいと思います。

④

⑤

⑥

⑦

2部
宮入隆ゼミⅠ・Ⅱ

参加学生数５名

宮入 隆
地域経済学科
教授

JA ふらの本所にて

道内野菜産地と大規模生産法人の発展の方向性

研修地：富良野市

◉研修目的

道内有数の野菜生産量を誇る富良野市を事例に、物価高など市場環境の変化の影響がどのように現れているのか、産地総体としての現状を JA や産地市場の調査から明らかにするとともに、大規模生産法人経営の実態分析を通して、今後の道内野菜生産の発展方向を検討する。

研修先・日程

8月26日　富良野地方卸売市場株式会社（本社および選果施設）
　　JA ふらの本所（販売部）
8月27日　JA ふらの扇山青果センター（選果・貯蔵施設）
　　株式会社天間農産本舗（事務所・圃場）

◉総　括

富良野農業の基幹である野菜生産は、JA のみならず産地業者も複数存在し、それらが切磋琢磨することで生産・集出荷・販売の各段階で、高度な商品化力を発展させてきた。産地主体としての JA および産地市場としての機能強化に取り組んできた富良野地方市場は双方とも、この厳しい環境下であっても、新たな技術・施設導入への投資を行い、販売力強化に取り組んでいた。それは地域内での集荷率の向上を目指した各主体の対応でもある。他方、全国有数のスイカ生産規模を誇る農業生産法人・天間農産本舗は、道外を中心に独自の販路開拓を進めてきたが、燃料費高騰やドライバー不足を受けて、コスト削減を期待できる道内への販路再編を進めて、経営の持続可能性を高めていた。今回の富良野農業研修で印象的であったのは、環境変化にも柔軟な対応を図る産地の強さであった。実需者のニーズに的確に応えるため、商品の高位平準化は進めつつも、雇用労働力不足は外国人労働者で補完し、物流の2024年問題には販路や配送形態の変更で対応し、高温障害には品種変更で対応するといったように、生産から販売まで多面的に改善を図っていくところが「ふらのブランド」の原動力であると改めて実感した。

写真①JA ふらの最新選果施設見学。②JA ふらの集出荷施設での調査。③JA ふらの本所での聞き取り風景。④天間農産での聞き取り調査。⑤天間農産のスイカ集荷場にて。⑥富良野地方市場の玉ねぎ集荷施設にて。⑦天間農産の圃場にて。

①

②

③

学生研修記

北上 風志
地域経済学２年
札幌真栄高校出身

法人経営からみえてきた研究テーマ

今年度の研修で私は農業者調査を担当しました。研修を行った農業生産法人である(株)天間農産本舗では、60ha＝東京ドーム約13個分という大きな耕地面積で生産しているのが特徴的でした。天間農産本舗ではスイカとメロンの２品目の生産を基幹にしています。これらは農協を通さない直接販売で、高い収益を生み出していました。また、スイカと同程度の面積で生産が行われている小麦の収益は小さいですが、輪作を行うことで連作障害を回避していることが分かりました。その他、高温障害対策への品種変更、独自の選果施設の導入による効率化の実現など、生産や出荷作業面において様々な工夫がされている事も知り、興味深かったです。

富良野市を舞台に、こういった事例調査を通して農業現場の実際を知ることができました。今回の研修で学んだ農協の労働力支援事業、６次産業化や事業の多角化戦略といった内容を今後の自身の研究で深めていきたいと思います。

寺島 花音
地域経済学科２年
豊富高校出身

「ふらの産」というブランド価値の重要性

研修を通して、農業経営、そして産地の持続可能性を高めるブランド化の重要性を実感しました。農産物に特別な意味を持たせて浸透させるブランド化の取り組みを、市内の各主体が行うことで、「ふらの産」農産物の持つ高い品質が強調され、消費者に価値を感じてもらうことができたのです。ブランド化の効果の１つが価格競争からの脱却です。例えば、メロンやスイカは特産品としての品質の高さを活かして高価格で販売されることが多く、農家の収益向上に繋がっています。また、一貫した品質管理と産地イメージの確立により、消費者の信頼を得ることができます。信頼はリピーターを増やし、安定した需要を創出することにつながります。

地域のブランド力向上は、農業経営のリスクを軽減し、持続可能性の向上に大きく寄与していると分かりました。今回の研修で、私は農業経営の持続的発展の実現につながる経営戦略についてさらに調査したいという意識が高まりました。

④

⑤

⑥

⑦

1部
山田誠治ゼミI

参加学生数15名

山田 誠治
地域経済学科
教授

道の駅みたら室蘭にて

室蘭市のデジタル化の取組と課題についての訪問調査

研修地：室蘭市

◉研修目的

山田ゼミでは、デジタルが地域の活性化にどのように活用されているか、をテーマに学修を積み上げてきた。今回は、具体的な進展が見られる室蘭市を訪問し、市の推進の方法、実際の効果について検証することを課題にした。

研修先・日程

9月3日　道の駅みたら室蘭で室蘭市概要の把握
室蘭市役所にて室蘭市デジタル推進、またCode for Muroranの説明を受ける
わかば会館にて、高砂自治会のデジタル自治会の推進状況の解説を受ける

9月4日　高砂清明自治会、サンライズ2丁目町会地域住民へのデジタル自治会の利用状況調査を実施
イタンキ浜に立ち寄る

写真①室蘭市役所澤田さんからの解説。②地図マップを活用。③連携のCode for Muroran の川口さんの説明。④室蘭のまちづくりイメージ⑤高砂自治会の取組を会館で解説。⑥町内会では会長さんからも熱いコールが。⑦アンケートは聞き取りと協力依頼文の配布で。

◉総　括

まず室蘭市ICT推進課の澤田さんのわかりやすさに感銘し、プレゼンの学習にもなったようで、あらためて感謝でした。

具体的には、防災災害へのGISの利用では、熊の出没マップ、災害マップなどの活用で、自治体間の連携やリアルタイム性の向上でより工夫をし、活用方法について様々な施策が取り込まれている状況について詳しく理解できました。

また、オープンデータの活用については、その利用方法について、ただ情報を公開すればいいわけではなく、誰に向けて、どのように分かりやすく公開すればいいのかを、作成者側が意図して作ることが重要である、と考えたようでした。

高砂町内会でのデジタル回覧板の解説を聴き、いろいろ課題はあるが、若い世代の参加が顕著にみられ、実際の活動を知ることで、新たな手間もかかるが一定の効果を実感できたようでした。

二日目に実施した町内会でのデジタル活用についてのアンケート調査では、いろいろの準備確認不足で十分回収はできず、面談ができたケースでも、前日の話とは異なり、低い認知度の現実に直面し、いろいろ考えさせられたようでした。

全体として、課題を感じつつもデジタル導入の一定の効果について実感できたと思われます。

学生研修記

草間 陽翔
地域経済学科２年
酪農学園大学附属
とわの森三愛高校出身

高齢者世代と若者世代の差を実感

室蘭市では行政と民間が連携し、地域活性化と市民の利便性向上を目指してDX（デジタルトランスフォーメーション）を推進しており、その具体的な実態について知ることができた研修であった。

町内会の調査では、なぜデジタル回覧板が広まらないかについて考えさせられ、参加意識が低い層や高齢者世代のスマホ普及率の低さ、などの課題を感じた。

GISやデジタル回覧板などDXの普及活動は、新しい形態の地域コニュニティを形成し、若年層の地域活動参加促進や防災活動・教育を通じた多世代間の連携強化を促進させ、地方課題の解決と持続可能な発展を目指すことができることは実感できた。

また、一方で、既存の形態の変化には地域住民との合意形成が必要不可欠であるため、特に同地域の高齢者世代と若者世代の差にどの様に対処するか今後重要になると考えた。

小林 紅葉
地域経済学科２年
札幌第一高等学校出身

地域活性化に向けたデジタル活用の可能性

今回の地域研修では、室蘭市のオープンデータ活用や町内会活動のデジタル化について学び、多くの気づきを得ました。胆振東部地震では、停電時の復旧状況を公開する地域間連携が実現し、オープンデータの重要性を実感しました。また、市内の路線地図が行政や公共機関に活用されていることから、データの汎用性も感じました。一方、高砂晴友町会ではLINE公式アカウントを導入し、デジタル回覧板で情報共有を行い、世代間のつながりを深めていました。特にコロナ禍での活動停滞を補い、若い世代の参加を促進している点が印象的でした。今後、デジタル技術を活用した地域の発展が期待される一方、次世代へ引き継ぐ仕組みづくりの重要性も考えさせられました。

1部
山田誠治ゼミⅡ

参加学生数19名

山田 誠治
地域経済学科
教授

会津若松のデジタル化の拠点スマートシティＡｉＣＴの施設にて

会津若松市のデジタル田園都市の取組の理解と課題の検証

研修地：福島県会津若松市

◉研修目的

デジタル田園都市構想の下、「スマートシティ」を先進的に進めている会津若松市を訪問し、具体的な取組であるデジタル地域通貨「会津コイン」の利用状況について商店街でのアンケート調査を行い、その検証とともに会津若松市からその政策の現状について解説を受けました。

研修先・日程

9月29日　会津若松市内巡回
9月30日　七日町商店街地域・神明町商店街地域を対象にグループ別にアンケート調査、会津若松市スマートシティＡｉＣＴにてコンソーシアムの村井さん、マートシティ推進室の鈴木さんからの「スマートシティの取り組みの全体像」「AiCT コンソーシアムの取り組みの全体像について」についての解説と質疑応答、会津若松市スマートシティＡｉＣＴの施設見学、会津若松市内の市内スポット見学

写真①仙台空港は東北の玄関口。②天守閣は会津若松の顔。③商店街では会津コインが浸透?。④会津コインのアンケート調査。⑤AiCTは城下町の中心に。⑥会津若松市による解説。⑦AiCTのデジタル化ラインナップ。

①

②

③

④

⑤

⑥

⑦

◉総　括

学生たちは、会津若松市がデジタル化をどう進めようとしているのか、一定の理解ができたと思います。開発拠点である会津若松スマートシティ AiCTでは、コンソーシアムというしくみで、相互に刺激し合いながら ビジネスアイデアを競い、現在進行中ではあるものの各ビジョンの展開方向については共感できました。ただ、データ利用の面では、オプトインを活用した市民一人一人の情報への配慮がなされた点は共感できましたが、ヘルスケアの領域に関して、各方面のデータをそれぞれから利用できるようにすることに伴う問題があり、データ一元化のリスクへの懸念も感じたようです。また、見学したその施設内では、ワーキングスペースが利用され、どんなふうに作業が進行しているかさらに知りたいと思った学生もいました。会津コインの利用については、商店街アンケート調査の結果、思った以上に中年層の方も利用しており、地域的で推進されていることも伺えたが、全国チェーンのコンビニでも導入している、していないの差があり、使い勝手の受け止めの違いなどがあると思ったようです。いずれにしろ、都市OS という形で様々な領域にDX化が広がっていく可能性を実感した研修でした。

学生研修記

安藤 里紗
地域経済学科３年
札幌国際情報高校出身

会津若松市での地域研修を通じて学んだこと

私たちは今回の研修で会津若松市を訪れ、１日目は移動、２日目から実際の調査を行いました。地域の方々へのアンケート調査やAiCTコンソーシアムの見学を行い、デジタル化の取り組みを身近に感じることが出来ました。AiCTコンソーシアムでは、開放的な空間で多様な企業や個人が集まり、相互に刺激し合いながら新たなビジネスやアイデアが生まれている様子が印象的でした。また、市役所職員とAiCTコンソーシアム会員企業（アクセンチュア）の方から地域経済の発展を目指す戦略や将来のビジョンを伺い、理解が深まりました。そして、アンケート調査では、地元のお店の従業員の方々や地域住民の方々と直接交流が出来、現状を知る貴重な機会となりました。二泊三日の研修を通じて、地域のデジタル化に対する熱意や取り組みを目の当たりにし、これからの発展に対する期待感を抱きました。地域の特性を活かしながら、創造性を発揮し成長する会津若松市の未来が益々楽しみです。

酒見 雄飛
地域経済学科３年
石狩南高校出身

会津若松でのDXの活用

今年度の山田ゼミでは、昨年に引つ続き地域経済に関するDXの研究を進めており、今回は福島県会津若松市における地域経済DXについて調査してきました。会津若松では「スマートシティ AICT」を核として様々な取り組みを行なっており実際の使用状況や課題などを現地調査してきました。

会津若松市ではアプリを使用したデジタル観光案内やデジタルで行政手続きや子育て支援を行える仕組みが整備されていて、市民だけでなく観光客や外国からきた人に向けても使えるようになっています。

そのほかにもスマートフォンアプリで使える地域通貨「会津コイン」の利用状況について、市民だけでなく導入している企業にも調査を行いました。しかしこの「会津コイン」は市民に認知はされているが浸透はしていないという課題も見つかりました。企業側もコンビニやドラックストアなど市民が身近に使う店舗でも導入されているがあまり使用されていないというのが現状でした。

しかし、会津若松市の取り組みは「スマートシティ AICT」を核として様々な地域DXを活用している地域なので、まだ課題は多いがこれから改善していくと、今後の日本各地で導入していくと便利で暮らしやすくなるものが多く、会津が先駆的に引っ張っていく存在になると現地調査を経て実感しました。

2部
山田誠治ゼミⅠ・Ⅱ

参加学生数25名

山田 誠治
地域経済学科
教授

羊蹄山を背にひらふウェルカムセンターにて

倶知安町観光 DX の開発と実態の検証

研修地：倶知安町

◉研修目的

ゼミでは、デジタルを活用し、つながりを生かした地域の存続・活性化を考えることをテーマに学修を積み重ねており、観光業で DX を積極的に追求している倶知安町を研修先に選び、現地担当者の説明と質問の機会を設け、現地の関係する人からのアンケート調査も行った。

研修先・日程

9月17日　倶知安町観光協会から解説・インタビュー（倶知安町ミッドタウンニセコ）
ニセコ店舗・観光客のデジタルマップ利用のアンケート調査（ニセコ比羅夫十字街）
9月18日　パークハイアット花園地区リゾートの施設見学（ニセコHANAZONOリゾート）

写真①倶知安町沼田さんからの政策説明。②ミッドタウンニセコで熱心に解説を聴きいる。③説明会場のミッドタウンニセコ。④アンケート・インタビューも閑散期で少ない人。⑤宿も森の中。⑥ニセコHANAZONOは富裕層向けの施設です。⑦施設は様々なサービスが。⑧花園リゾートに一目。

①

②

③

④

⑤

⑥

⑦

⑧

◉総　括

総じて、DX技術は想像以上に進んでいる、と思ったようだ。倶知安町観光商工課の沼田さんからの説明によると、現地のスマートリゾート化で、リアルタイムのトレイルマップでリフトの運行や混雑状況を旅行客に提供したり、シャトルバスの位置情報やレストハウス混雑度をAIカメラの観測データも活用し、旅行客にとって効果的な取組が紹介された。課題としては、システムの仕様の変更によっては、手間が増えたり、効率を落としてしまうというケースも起こる、とのことであった。また、外国人の労働者に関する解説も聴いたが、実際にホテルの従業者や観光客の外国人と直接接し、実感としても、彼らの存在の重要性を感じたようだ。さらに、倶知安の町の事業者・観光客・従業者からのアンケート・インタビューでは、デジタル化の施策の利用はあまり浸透しておらず、導入に際して、DX化を推し進めるには技術面だけでなく合意形成と、市町村とそこに住む住民との関係性が重要であり、手間と時間を要する、という説明が実感できた。

全体を通して、推進には合意形成を進め、地元や観光の利用者と開発技術者との認識のずれをどう埋めるか、が肝要だと考えたようだ。

学生研修記

吉田 匠真
地域経済学科２年
旭川大学高校出身

デジタル化で観光業を支える

今年度、私たちは倶知安町でデジタル化による地域活性化をテーマに、観光業でデジタル技術がどう活かされているかについて学びました。倶知安町では、世界屈指のスキーリゾートを活かし、冬季は外国人観光客を中心とした観光業が盛んです。また、閑散期にはサイクリングやジップラインなどの新しい需要の創出にも取り組んでいます。このような観光業を支えるために倶知安町では様々なデジタル化を進めています。例えば、ニセコデジタルマップです。ニセコデジタルマップとは、飲食店やアクティビティなどの情報を集約 し、現在地からルート案内や施設情報を容易に取得できるサービスです。しかし、現地の人へのアンケートにより、認知度が明らかに低いことがわかりました。デジタル化の推進に加え、周知させる取り組みも必要であり、課題は多く残っていると考えます。足を運ぶことで事前学習とのギャップもあり、今後欠かすことのできないデジタル化について学びが深まったと実感しました。

藤原 康太郎
地域経済学科３年
札幌清田高校出身

倶知安町における観光DXの現状と課題について

私たちは倶知安町での地域研修を通じて、観光DXの現状と課題について学んだ。研修地では、倶知安町観光協会の方から解説していただき、観光DXにより、ニセコデジタルマップやリアルタイム混雑情報の提供、宿泊需要予測データなどの取り組みが行われていることが分かった。地域住民に対するデジタルマップのアンケート調査では、「知っているが使用したことがない」「使用経験はあるが扱いにくい」という意見が多く寄せられた。今回この地域研修から考察できる点として、観光DXの認知度や利用率は住民や観光事業者の間でまだ十分に高いとは言えないと感じた。また、観光地としての高い物価や生活コストが地域住民の生活に与える影響にも課題があると認識した。今後は、観光DXを推進するには、住民や事業者への周知と活用支援が必要であり、地域の課題を包括的に捉えた対策が求められると感じた研修であった。

地域研修報告会

2024年12月18日(水)、20日(金)、21日(土)、23日(月)

2024年度の地域研修報告会は、2024年12月18日（水）、20日（金）、23日（月）の３日間の日程で開催されました。同報告会は経済学部の「地域研修Ⅰ・Ⅱ」の一環として毎年実施するもので、今年度は32グループ（うち５グループは21日に開催）が研修の成果を披露してくれました。

コロナ禍明けの昨年度に引き続き、今年度も充実した地域研修を行うことができたようです。学生は道内外に足を運び、実際に見て、聞いて、触れて、地域の社会・経済・文化の多様な姿かたちと、それぞれに個性豊かな地域づくりの実践について見聞を広げました。道内の研修先は、足元の札幌市のほか、室蘭市、帯広市、釧路市などの主要都市、そして数多くの農山漁村というように多岐にわたります。また、福島県、兵庫県、鳥取県など、道外に飛び出し、学びを深めたゼミナールもみられました。

地域研修の実施方法は年々工夫が重ねられています。例えば、地元の方々と一緒に活動しながら地域調査に取り組む「参加型」が根付きつつあります。地域研修報告会は、個々の地域の実情を知る場としてだけでなく、こうした地域調査の在り方を巡る新たな知見やノウハウを共有する場にもなっているようです。（早尻正宏）

◎報告会ゼミ・研修地

【12月18日（水)】

4時限目●31番教室（44名） 運営担当：西村先生

① 内田１部Ⅰ・Ⅱ（小樽）② 佐藤１部Ⅰ（江別・札幌）③ 西村１部Ⅰ・Ⅱ（芽室）④ 藤田２部Ⅰ・Ⅱ（長沼）

4時限目●60番教室（30名） 運営担当：内田先生

① 西村1部Ⅰ・Ⅱ（留萌） ② 藤田１部Ⅰ（兵庫・大阪）③ 内田２部Ⅰ・Ⅱ（小樽）

５時限目●60番教室（65名） 運営担当：水野谷先生

① 牛久１部Ⅱ（ニセコ）② 佐藤１部Ⅱ（留萌・小平・増毛） ③ 藤田１部Ⅱ（栗山・安平） ④ 水野谷１部Ⅰ・Ⅱ（帯広）

【12月20日（金)】

4時限目●15番教室（19名） 運営担当：大貝先生

① 西村・濱田２部Ⅰ・Ⅱ（豊浦） ② 平野1・２部Ⅰ・Ⅱ（札幌） ③ 水野谷２部Ⅱ（釧路）

4時限目●60番教室（31名） 運営担当：平野先生

① 大貝１部Ⅱ（日高・新ひだか・浦河）② 水野１部Ⅰ・Ⅱ（月形・当別）③ 宮入１部Ⅰ・Ⅱ（足寄）

５時限目●60番教室（56名） 運営担当：宮入先生

①大貝１部Ⅰ（鳥取・岡山・京都）② 濱田１部Ⅰ・Ⅱ（沼田） ③ 宮入２部Ⅰ・Ⅱ（富良野）

【12月21日（土)】

２時限目●D42番教室（62名） 運営担当：浅妻先生

① 上園１部Ⅱ（岩内）② 上園２部Ⅰ・Ⅱ（岩内）③ 浅妻１・２部Ⅱ（札幌）④ 上園１部Ⅰ（豊富）⑤ 浅妻１・２部Ⅱ（室蘭）

【12月23日（月)】

４時限目●42番教室（45名） 運営担当：土橋先生

① 山田１部Ⅰ（室蘭）② 土橋２部Ⅰ（帯広）③ 山田２部Ⅰ・Ⅱ（倶知安）

５時限目● 60 番教室（50 名） 運営担当：中囿先生

① 土橋１部Ⅰ（帯広）② 中囿１部Ⅱ（札幌）③ 古林１部Ⅱ（帯広・本別）④ 山田１部Ⅱ（福島県会津若松）

【12月18日（水）報告会】

【12月20日（金）報告会】

【12月21日（土）報告会】

【12月23日（月）報告会】

地域研修ギャラリー

北海学園大学 経済学部

地域研修報告書 2024

北海学園大学 経済学部
［経済学科・地域経済学科］
〒062-8605 札幌市豊平区旭町4丁目1番40号
TEL：(011) 841-1161 (内線2257)
https://www.hgu.jp/
https://econ.hgu.jp/

2025年3月発行
制作(株) ラボット